曠野集　秋上

土岐文庫
文庫17
W46
4

立秋
驚立秋
立秋天
立秋露
立秋夕
立秋朝
立秋色
立秋風
立秋衣
社頭立秋
水邊立秋
野立秋
行路立秋
立秋荻
立秋述懐
早涼知秋
風告秋
海邊秋来
閑居秋来
荒屋秋来
山家秋来
初秋
初秋雨
初秋朝
初秋夕
初秋夜
初秋露
初秋虫
初秋待月
初秋風
初秋松風
初秋夜風
初秋涙
初秋懐
初秋衣
初秋扇
山中初秋
岡初秋
野初秋
森初秋
初秋落葉
名所初秋
里新秋
山家初秋
田家初秋
田初秋
早秋
早秋風
早秋露
早秋雲
早秋夕
名所早秋
原早秋
森早秋
閑居早秋

文庫 17
W46
4
昭和六十年二月一日 [illegible]氏寄贈
010185194880

里早秋　田家早秋　山家早秋　濱早秋　浦早秋
早秋萩　七夕　久待七夕　待七夕　牛女悦秋来
六日　六日夜　七日待夕　七夕迎夜　乞巧奠
七夕夜　七夕惜夜　牛女年〻渡　今宵織女渡天河　七夕待
思牛女　夜思牛女　暁思牛女　二星逢　二星適逢
織女契　織女契久　七夕幽思　七夕眺望　二星朝秋
七夕月　七夕雲　雲織女衣　七夕風　七夕露
七夕霧　七夕雨　禁中七夕　七夕別人　旅宿七夕
七夕道　海邊七夕　水邊七夕　七夕心　七夕言志
七夕石　七夕女　七夕語　七夕涙　七夕戀
叢七夕　七夕草　七夕梶　七夕木　七夕川

七夕滝　七夕波　七夕瀬　七夕津　七夕渡
七夕綱　七夕舟　七夕橋　七夕氷　七夕池
七夕田　七夕蛛　七夕鳥　七夕糸　七夕機
七夕錦　七夕衣　七夕袖　七夕領巾　七夕鬘
七夕枕　七夕焼物　七夕梨　七夕扇　七夕幣
七夕祈　七夕夜深　七夕早明　七夕暁　二星別
二星惜別　七夕後朝　八日　九日　閏七月七日
七夕祝　七夕庚申　寄七夕述懐　七夕懐旧　二星述懐
萩　萩風　萩風寒　萩告秋　萩知秋
初秋萩　驚萩　萩音高　聞萩　暁聞萩
月前萩　風前萩　夕萩　夕萩風　萩似人来　聞萩戀人

山家萩風　閑居萩　閑庭萩　故郷萩　荒宅萩
籬萩　暮秋萩　寄萩述懐　葛　社頭葛
葛風　暮秋葛　萩　萩盛　萩露
萩上露　萩露滋　萩露重　萩露如玉　月前萩
夕萩　夜萩　風前萩　雨中萩　思萩
朝思萩　雨夜思萩　思野萩　折萩　愛萩
翫萩　萩花移衣　萩間待人　萩盛慮人　野萩
満野萩　野径萩　萩隠野径　故郷萩　旧宅萩
庭萩　隣庭萩　名所萩　旅行翫萩　行路萩
依萩廻路　田家萩　秋情寄萩　秋色在萩　惜萩
萩欲散　萩散風　萩花落　野萩摺　萩紅葉

女郎花　女郎花明秋　女郎花初開　露滴女郎花　風前女郎花
女郎花随風　女郎花靡風　朝女郎花　夕女郎花　終日見女郎花
夜女郎花　女郎花帯露　女郎花翫露　女郎花多　荒屋女郎花
野亭女郎花　野女郎花　籬中女郎花　旅宿女郎花　名所女郎花
山中女郎花　岡女郎花　岸邊女郎花　水邊女郎花　池邊女郎花
折女郎花　愛女郎花　翫女郎花　女郎花留人　惜寄女郎花
惜女郎花　寄女郎花懐旧　寄女郎花述懐　薄 尾花同　栽薄
薄出穂　初尾花　風前薄　薄随風　薄靡風
薄露　夕薄　尾花似浪　薄似袖　名所尾花
野薄　岡薄　行路薄　古宅薄　閑居薄
閑庭薄　暮秋薄　秋興在尾花　尾花留人　刈萱

風前刈萱　刈萱帯露　夕刈萱　古籬刈萱　寄刈萱述懐
蘭　水邊蘭　所々蘭　蘭花芳　雨中蘭
蘭露　野蘭　折蘭　槿花 朝顔同　垣槿花
朝顔珍　山寺朝顔　露底槿花　暁更槿花　きちかう花
草花　草花告秋　待草花　暮尋草花　尋野花
草花纔開　朝見草花　夕見草花　近見野花　近對草花
風前草花　風動野花　月照草花　月前草花　雨中草花
草花帯露　秋花帯露開　野花帯露　野花露　池邊草花
水邊草花　秋花　秋花色々　秋花催興　社頭秋花
野草花　思野花　野径草花　野花妨路　栽秋花
庭移秋花　庭盡秋花　家移野花　野花薫衣　野花染衣

秋花留人　野花留客　老見秋花　惜秋花　寄秋花懐旧
露　秋露　秋露重　秋露滋　朝露
朝露如玉　夕秋露　夜露　深夜露　露秋夜玉
露如玉　月前露　野露映月　月照草露　露寒々
露脆　悲露　憐露　雨後露　風前露
庭前露　庭草露　閑庭露滋　假庵露　故郷露
野露　野露如玉　野径露滋　淺茅露　野草帯露
野草露滋　草上露　草露如玉　露草葉玉　叢中露
芝露　篠露　葉上露　袖露　袂露
露世人涙　客衣染露　客衣露重　旅病露　別路露
霧中露　山中露　山路露　名所露　海邊露

暮秋露
寄露祝
寄露懐舊
寄露述懐
秋風

聞秋風
驚秋風
秋風如浪
秋風涼
秋風漸寒

秋風寒
夕穐風
夜秋風
野秋風
野外秋風

野分
野路秋風
山秋風
深山秋風
麓穐風

名所秋風
河上秋風
池邊秋風
海邊秋風
濱秋風

森秋風
關路秋風
旅宿秋風
行路秋風
山路秋風

故郷秋風
田家秋風
山家秋風
幽居秋風
庭前秋風

竹間秋風
松上秋風
穐風催興
秋風歎花
暮秋穐風

虫
尋虫聲
聞虫
終夜聞虫
思虫

虫思
虫恨
虫聲寒
夕虫
夜虫

寒夜虫
霜夜虫
深夜聞虫
夜鈴虫
曉虫

經年聞虫
寝覺聞虫
月前虫
待月聞虫聲
雨中虫

風前虫聲
露底虫
虫聲非一
虫聲滋
虫為夜友

虫聲似人来
遇友聞虫
野虫
寒野虫
滿野虫聲

叢中夜虫
草虫
淺茅虫
虫鳴草花
河邊虫

山中松虫
古宮虫
故郷虫
古宅虫
幽居虫

荒庭蛬
閑庭蛬
庭夜虫
閑庭松虫
前栽放虫

草庵虫
園虫
閨虫
床聞蛬
壁聞虫

枕邊虫
旅宿虫
虫聲漸衰
虫聲欲枯
虫聲枯

暮秋虫
虫聲惜秋
松虫
鈴虫
蛬

促織
寄虫述懐
寄虫懐舊
蜩
荻盛待鹿

鹿遅
鹿
鹿聲馴秋
鹿知秋
聞鹿

朝聞鹿
毎朝聞鹿
夕聞鹿
暁聞鹿
夜聞鹿声
深夜聞鹿
終夜鹿声
寝覚聞鹿
月前鹿
風前鹿
鹿声比風
鹿声比嵐
雨中鹿
鹿隠霧
霧中鹿
原鹿
野鹿
野夜鹿
岡鹿
田家聞鹿
樹間鹿
鹿交萩
鹿鳴秋萩
名所鹿
旅宿鹿
行路鹿
島鹿
夜泊鹿
鹿声遠
近鹿
鹿声両方
鹿声驚
山鹿
山中夕鹿
暁聞山鹿
山家聞鹿
山家夕鹿
山居鹿
深山聞鹿
深山夕鹿
深山暁鹿
麓鹿
山路鹿
洞底鹿
嶺鹿
鹿声留客
若聞鹿
鹿声驚夢
鹿声催涙
寄鹿述懐
暮秋鹿
秋望
秋眺望
水郷秋望
山邊秋望

野秋望
山路秋行
秋興
野外秋興
野秋興
仙家秋興
山中秋興
河邊秋興
田家秋興
山家秋興
秋夕
秋夕天
秋夕月
秋夕風
秋夕雲
秋夕露
山中秋夕
深山秋夕
野径秋夕
森秋夕
海邊秋夕
浦秋夕
名所秋夕
山居秋夕
閑居秋夕
里秋夕
故郷秋夕
澤秋夕
秋夕情
秋夕思
秋夕傷心
秋夕催涙
老後秋夕
稲妻
秋田
秋山田
遠秋田
秋田風
秋田露
秋田庵
引板ひた
稲花
稲
寄稲祝
穭田
秋夜
秋夜深
秋夜思
秋夜長
秋夜寒
秋夜嵐
秋夜露
野秋夜
秋夜宿野亭
閑中秋夜

惜秋夜　秋寝覚　秋夢　秋雨　秋時雨
蝦かえつ　小鷹狩　駒迎　駒引　關駒迎
月　秋月雁　秋月添光　待月　對山待月
對水待月　毎家待月　深夜待月　兼待月　久待月
待見月　見月　年々見月　毎秋見月　深夜見月
毎夜見月　連夜見月　終夜見月　閑見月　獨見月
獨對月　翫月　終夜翫月　連夜翫月　嶺上翫月
人家翫月　翫明月　池上翫月　翫月　夜ゝ翫月
未出月　月初出　初昇月　漸昇月　傳手月
漸傾月　傾月　欲入月　惜入月　入月
入後慕月

悟野集巻之四

秋之部上

立秋
[illegible]

残暑
立秋之秋
立秋露
立秋夕
立秋朝
立秋色
立秋風

立秋夜
社頭立秋
水邊立秋
野立秋
月前立秋
立秋荻
立秋感懐
早涼知秋
風告秋
海邊秋来

後拾
うたゝねに袂涼しく覚るは衣に秋はきにけるなりけり　読人しらず

代
いつのまに衣は薄しか松原の衣手寒し秋の初かせ　鎌倉右大臣

千
神かきの松吹風もかはらねど宮には秋も分けし来ぬ　重之

古
川風の涼しくもあるかうちよする波とともにや秋は立らん　貫之

後拾
浅茅原玉まく葛のうら風のうらかなしかる秋はきにけり　恵慶△

代
立そむるけふの秋風ならねども衣手まづひとへなりや　為家

千
秋立と吹ぬるからに一家居の荻の上風のはらふらん　侍従のめのと

新
ことしより家には秋のきぬらんと秋はてらしてとも沢にとはまし　大納言

代
うきくもの秋の初めにはあらじ夜の衣ゆく秋の立　経信

千
秋はきぬ年も半に過ぬとや荻吹風のおとろかすらん　寂然△

新
秋きぬと松吹風もしらせけりかならず荻の上葉ならねど　権大夫

六
荻の葉に吹くる風ぞ秋きぬと人に告ぬる始なりける　業平

月
荻原やいとゞ風の音にや知ぬ秋きぬと告て過ぬる　俊成△

代
つゝみの原初めの空に涼しく知ぬ秋の初風　有家

閑居秋来
荒屋秋来
山家秋来
初秋
初秋風
初秋朝
初秋夕
初秋夜
初秋露

拾
八重葎しげれる宿のさびしきに人こそ見えね秋はきにけり　恵慶△

千
八重葎さしこもりにし蓬生にいかでか秋のわけてきつらん　俊成

新
いつも聞麓の里と思へども昨日にかはる山おろしの風　後徳大寺

後
いつはりを人をいはねども秋風ふくと人に告けり　業平

新
軒ちかき荻の上葉の音きけばやゝ冷しき秋の初かせ　好忠

代
うちなびく夏はそれともなけれども秋立日の吹そむる妹のかせ　道覚△

今
とにかくに吹むかふ風の吹そふ人の心をしれる秋の初風　以主

万
秋立ていくかもあらねば此ねぬる朝けの風は袂寒しも　安貴王

勅
暮ゆけば空のけしきはいつしかと袖にしらるゝ秋の初かせ　家隆

後
秋風の打吹そむる夕暮は空に心ぞ先かはりける　読人しらず

代
秋立てことぞともなく思はぬは荻の葉そよぐ夕暮の声　長方

新
寝覚なる枕の上に置露や秋は来ぬる秋のかぜ　具親

代
吹てふる秋の板戸にと音こそいとゞ秋風はさむく覚△

新
哀またいかに忍ばん袖の露野原の風に秋はきにけり　通具

初秋出
初秋待ノ
初旅風
初涼松風
初秋夜風
初秋涼
初秋懐
初秋衣

後 ねざめしの初秋さへて秋風は吾妹子がそでそめぬなり　前大僧正慈鎮

六 家路にて秋たきにかかりむべし去そ打解ぬまに出けれ　仝

万 筆とれば秋風身にしみとほりけり入ぬるむすびの手まくら　家持

新 ちりそめて梢はさぬ人もあらばおくる秋のきつる風　西行

勅 吾妹子今はふきぬ家君の荻の上葉の秋の初かぜ　為家

続 夜衣すこしうすく小荻のはの末わけて秋風ぞ吹　定家

代 いかにしてわかしむ我は涼しくも吾こそわけぬ秋風ぞ吹　少将内侍

相 新玉の七年も半すぎにけり涼数そよ荻の上の露　元家

新 吹風の我をとひきの松の戸に秋はきにけり　秀能

勅 夕暮の宿戸の軒をめぐる小秋のはかなく秋の初風　好忠

千 秋風も涼しくなりぬすがたまん吾たれに袖かへしぬ　後拾

古 木の葉ふかく我付けは吾かは秋風吹ば散る涙の露　読人不識

拾 物ごとに秋ぞかなしきまさりける花びらと浪と云へど　仝

夜衣すこしひとへなる露に袖にしてそよぐ秋の初風　安法

初秋扇
山中初秋
園初秋
野初秋
寺初秋
初秋旅宿
名所初秋
里初秋
山家初秋
田家初秋
田初秋

後拾 大かたの秋をまつにかをとくまちし扇の風ぞふきくる　為藤

新 うたたねの袖のまどふる袖にこぼるるそ扇の秋の夕風　式子内親王

勅 足実の宮の風のいたのまに吹くえて秋はきにけり　資季

新 わぐきの園の葛葉に吹付て今さらぬ秋の初風　顕昭

勅 玉ふねく家々にそれてむかし野の草の露結ぶ秋の風　西行

千 秋のくるにまかせて荻の下風に立そよぐわれはおもひかな　堀川

新 代きのそをにとどむとしりし津の国の生田の森に秋はきにけり　家隆

新 代 吹風に中楽の花もち柳のみどりきにけり　後京極

六 涼ありの家わかばからば秋わびくれど秋はきにけり　摂政

新 東路のいさめの里は初秋の夕ぐれはしたふ色ぞかはる　皇太后宮大夫

代 いかにねるらん夜半のあきの里の秋の初か　家隆

続 いかにしく小倉の秋やつかねど里の松吹風はと小倉　好忠

新 初山城の鳥羽田の面に渡せばかなかなさぞ秋風は吹く　中任

新 君がうらさえし留に吹きかへて又袖濡て秋はきにけり　信実

早秋

拾 秋やきぬ立田の山もみてしがなしぐれぬ先に色やかはると　読人しらず

勅 夜やさむく今朝や幾日に来ぬらん衣手涼し松の秋風　関白左大臣

代 手になれし扇の風もわすられて衣の袖に秋のきぬれば　東三条入道

今 さびしさの色はおもはねどわかれじな草木の露の秋の初風　信実

後 音たてて秋はきにけり松かぜの秋風のまづ吹くらん　千里

勅 山里は葛のうら葉に吹く風の音に家に秋は知らるる　在良

早秋風

有 秋きぬと云ふで吹く大空はおもひなしにや風の音かな　忠慶

代 七夕にかしてはやかれ萩こそ知られ草で秋のはつ風　隆信

今 いつしかと萩の上葉は音たれて袖にしらるる秋の初風　後京極摂政

勅 ささ葛ちらぬ袖の上までもかはる秋は来にけり　丹後

月 天の川風吹くらし夕暮の雲のたえまに秋は来にけり　内大臣

代 秋にまく秋はきにけらし七夕の夕べの風に衣たちくる　少将

勅 夕暮は衣手涼し名国の屋上の衣は秋の初風　鎌倉右大臣

続 音はして秋は来にけり浅茅が末の初風ぞふく　頼季

早秋露

早秋雨

早秋夕

名所早秋

原早秋

新 朝まだきまだあけはてし津の国の生田の森の秋の初風　良経

勅 吹きそむる音だにかはれ山城のときはの森の秋の初風　内大臣

今 昔にはいとどかはらぬ人の声もしのばれ萩の上風はみにぞしむらん　良仙

秋 鶉なく夕べの立田の山里までぞ秋きにけりと海らしる　法性寺入道

金 いまぞ吹く風の音きく宿すらは何に付けてか秋は知るらん　伊通

月 山深み日々人まれなれど外面なる田に秋は来にけり　行盛

続 あさ露のつゆ秋わきに山里の葛はひかかる松のふせやよ　経信

代 山里はいとどしのびにまさりけるいくたびわらね秋の夕暮　経通

代 いにしへのままに秋風ぞたつ大津の宮の浜松がえに　入道前摂政

今 おしなべて吹にけらし沖つ白波の浦の秋の初風　伊家

勅 まだきより涼しく更わるる夜の袖の浦の秋の初風　信実

代 手まくらの露や秋はきてこそしらね萩の上風　忠房

男 秋風の吹けばいくらも君待つと　慶宣

杜早秋

関路早秋

里早秋

田家早秋

山家早秋

海辺早秋

浦早秋

早秋萩

七夕

古 年ごとに逢ふとはすれど七夕の寝る夜の数ぞすくなかりける　躬恒

金
織女の苔の衣はいとはずは人なみ〳〵にかしもしてまし　能因法師

詞
天川をとも渡いそぎけん浅せをたどる夜の更ゆくよ　顕季

勅
天河星合の空を見わたせば立わたるらしその秋霧　左良

代
あまの川わたせの浪のおとさえて我立まちしかひはなきかな　家持

仝
棚機の待つる中を逢ふとの数は多くの年や経ぬらん　為経

仝
年ごとにまつも色え絶まは秋のなかの七日やなから　むらさき式部

拾
逢ふことは忘らぬ秋のひと夜ぞと君が逢せは渡るとは　伊勢大輔

久待七夕

万
秋風の吹にし日より天の河瀬に出立てまつと告こそ　読人不知

待七夕

古
秋風の吹にし日より久方の天の川原に立ぬ日はなし　仝

後
秋くれば川霧わたる天の川かはかみ見つゝ恋ふる日の多き　仝

牛女悦秋来

拾
天の川岩こす浪のたちゐつゝ秋の七日の今日をしぞ待つ　柿本人丸

勅
彦星の行合を待つ久方の天の川原に秋風ぞ吹　鎌倉右大臣

六日

古
いつしかとまたぐ心をはぎにあげて天の河原を今日やわたらん　兼輔

六日夜

後拾
一年の思ひけるもの棚機の七日はいかにゆかりならむ　小弁

七日待夕

後拾
逢ふ事を待つ日ひさしき雲の乱れはくとくらみくの葉は渡らん　小左近

古
年ねら日のちゝや業平ん久方の天の川霧立てるべく　躬恒

続
今さへや袖はぬらさん待わびの暮まつほどの天の七夜　読人不知

七夕遇夜

代
くれば渡る鵲の橋よりおなじ夕べに渡しきても渡れ　上東門院

千
たなばたの今日の逢ふ瀬やいかならん渡しまつの夕暮のそら　権中納言大納言

代
七夕のあまつとはいと待ちわたる天の川霧立ちわたるそら　前関白

後
夕暮は待ちわびぬれば今日の秋はいかに我まちわびぬらん月ひと　おとゝ

七夕ニ待

後
天の川すゞしくてはひとつくれかゝる雲とも見せぬ程く〈らん〉　右近大将

拾
秋風にまつの夕べは天の川わたせに浪のたつかとぞみる　恵慶法師

後拾
棚機の逢ふ瀬すぎ秋とはなし今の年々見ねん人のいでもぞ待る　能因法師

勅
ささぐにの夕の棚機とそすら待渡る夜を惜まる　大輔

七日夜

古
天の河あさせしら浪たどりつゝわたりはてねばあけぞしにける　友則

代
くれぬ日はおなじ待とまちしへ年の一夜もまぢかき秋と思はん　仝

七夕惜夜

古
恋ひ〳〵て逢ふ夜はこよひ天の河霧立わたりあけずもあらなん　読人不知

牛女年々渡

秋の夜のなほあかなくにわかるゝのあくると背へゆかずもあらなん　読人不知

契りけんかとはおもへど逢瀬すの[illegible]の天の河なみ　宗治入道

久方の天の川なる[illegible]の舟をそひつゝ　宗尊

今夜織女渡天河

一とせにまてしと背こそ思はれ[illegible]天の川原にてわたるらん　忠岑

乞巧奠

思はれてこそもみる瀬ふかのいとく斗まつるらん　読人不知

家いのをとひとつぞその河風にさらぬ[illegible]　小弁

思牛女

たなばたは逢ふことどもみたぬかはかなしとる　読人不知

恋そわたるそなたを思ふ[illegible]　範綱

織女の待つ夜のあさとわかぬ別とはいぜれまされ　入道前関白

夜思牛女

いくかずわかれてねん棚機の妻まつ宵の天の川風　顕家

逢ことは稀に契りをこうの家ゐて[illegible]　中務卿

暁別牛女

背ぬはこの衣がしらむ[illegible]と背ならん　堀川太大臣

逢ふ夜とは[illegible]棚機の中有にかくまへる　良暹

二星逢

天の川ながれてはやくあふ瀬にも袖ぬらしける暁のそら　法性寺太政大臣

彦星と思ひてぬらしけん天の川と小浪立[illegible]　皇太后宮大夫

天河かぢの音きこゆ彦星と棚機つめと今夜逢ふらし　柿本人丸

二星適逢

むつごとも[illegible]さねしく年のわたりに一夜のみ　仝

天の川遠き渡にあらねども君が舟出は年にこそまて　付

[illegible]彦星の[illegible]天河[illegible]年のせ　家持

織女雲

契りけん心ぞつらき棚機の年に一度逢ふは逢ふかは　興風

織女は今宵定めて契るらん逢ふ瀬とたのむ年のうきさは　堀川太政大臣

織女の我ひとつの逢ふことは年に一夜と契りけむ　経輔

織女契久

恋ひ恋ひて[illegible]一夜と契り絶えん　基長

一年に一夜と思へど織女の逢ひみる秋の限りなきかな　貫之

七夕無思

天河なれにし逢瀬と思ひしは[illegible]契やする　範綱

彦星の妻まつ宵の[illegible]我も思はん　皇太后宮大夫

七夕眺望

眺むれば衣手涼し久方の天の川原の秋の夕暮　式子内親王

二星適逢秋

七夕月

七夕雲

雲収織女夜

七夕風

七夕露

代 天の原ふりさけ見れば棚機の星のやどりに雲立ちわたる　高遠

古 天の川紅葉を橋にわたせばや棚機つめの秋をしも待つ　読人しらず

六 夕ぐれは久しきものを天の川棚機つめぞ待ちわたるらむ　貫之

万 織女の舟のとまりもしらぬまに遠き月ぞ先立ちにける　読人しらず

仝 秋風の吹きにし日よりひさかたの天の川原にたたぬ日はなし　仝

拾 さ夜ふけて天の川をぞ出でて見るいづ方ざまに渡るらむと　仝

月 星合の空にかかれる白雲ぞ秋ふくる夜の天のとだえか　季保

代 織女の手にまかせたる白雲のあやなく空にかかるなりけり　輔尹

新 星合の夕べ涼しき天の川紅葉の橋をわたる秋風　公経

月 たなばたの夜のひきまにかして吹きこしも秋の初風　小弁

仝 棚機の天の羽衣うちかさね寝る夜涼しき秋風ぞ吹く　高遠

月 心ある秋の星の露まさる夜の天の川波　清輔

代 天の川風吹きこえてたなばたの逢ふ瀬の波もさわぐらん　顕昭

後 天の川かれて音する音をきけば秋のしら露　読人しらず

七夕霧

七夕雨

擣衣七夕

七夕別人

旅宿七夕

七夕遊

海辺七夕

水辺七夕

七夕心

七夕后朝

新 いとどしく思ひかねてや棚機の袖にはおくるしら露　経宜

万 君が舟今ぞこぐらし天の川霧立ちわたる此の川の瀬に　[illegible]

月 此の夕べ降りくる雨は彦星のと渡る舟の櫂のしづくか　読人しらず

後 雨降りて渡らぬ天の川ならば年ひとよをもふらしめやは　仲正

月 逢ふ事はねがひもあへぬ織女のかしこく結ぶを　宗珍

続 雲晴るる渡る天の川星合の空ひとへにけり　三河内侍

拾 天の川のかはせに舟をよせばいつか棚機をふねぞうかぶ　て任

月 棚機の草の枕はかはさねど袖は秋風ぞふく　季経

代 逢ふことはたえぬ中にて年の逢瀬もまだしらぬ　俊成

月 うきねする夜の波の上にうつりてそそぐ星合の空　忠岑

拾 たなばたの天の羽衣うちかさね寝るよすずしき秋風ぞ吹く　宮女

剣 棚機にかしつる糸のうちはへて年のをながく恋ひやわたらむ　顕綱

代 織女は逢ふ夜とてわがきぬのおもふひまなき　守覚

拾 逢ふことのうれしさにあまり天の川とも恋ひつつあかすまし　玉麿

七夕名
七夕出
七夕説
七夕涙
七夕恋

拾 いまぞしるに色ある月日ばへだてこしあふせのあはれとしらくすしらば　恵慶

続拾 たえぬる一夜ばかりまつまでの逢見ぬ程とおもはましかば　直房

月 せきとめの逢瀬の数の経てぬる月ごとのちぎりならせば　元任

新 つれづれに天の川波かへりつつゆる夜はへだてなるべき　嚴子女王

六 一とせに一夜はまれぬるもいかにあまとふ思ひたるらん　其人

新 織女のと渡る舟のかぢの葉に幾秋書きつ露の玉章　俊成

月 あふせは文月きたりぬ年の内にまたこそかささぎの橋　隆恵

物 むかしよりたへぬ思ひに秋風にまねかれぬるは袖やぬるらん　高倉

月 まちえてぞ橋に逢瀬のむつ言は天の川まで渡しそむるか　季貞

仝 程もなく明ゆく空のかなしきはあまりむつ言の始なりけん　公衡

拾 うらむぞ夜半にねざめしつる唐衣いと涙ぞ袖やぬるらん　其人

物 天の川かよふ舟にはあまたたびいくそたびわかれの涙まさるらむ　清輔

代 秋ごとにいかでたなばたの機のゆく雲のたえし衣　重之

後 せきとめしあまのと渡ると見えつ遠方人の衣するなる　読人不知

寄七夕
七夕草
七夕梶
七夕木
七夕川
七夕滝

拾 彦星のゆきあひの秋風に秋さへおかれし人をまちけむ　美作

仝 大空は霧にかすみて彦星のゆきかふ秋もひとりかねやねん　丹後

新 ひこ星のゆき合をまつかささぎのと渡る橋を我にかさなん　菅贈太政

物 かささぎのゆき合の橋は月なれど猶わたすべき日数ぞ遠き　師氏

六 ほどもなく逢機織は人もなくまだ見ぬ秋まで有ける　い世

代 まちわびの橋の数ましは手をまもり合の空を眺めて　東三条院

万 天の川かぢの音の秋風にまたきもてば時ぞ来らし　作者不知

後 彦星の梶に逢瀬の床夜は打ちとけてこそ寝べかりけれ　読人不知

後拾 天の河とわたる舟のかぢの葉に思ふことをも書きつくるかな　上総乳母

物 草の上に露とるよひの玉づさにちぎりの文をかはすらん　家隆

代 天の河年にふたたびわたるの秋の御　兼方

万 天の川と渡る世をいはでふる君ぞまちわびむ　読人不知

後 たなばたは今日の川瀬はあはせなん淵せともなくれは波の宿　友則

古 ぬしもしてさらせる布は織女に手向けへりさまし　長能

七夕浪

万　天川うき津の浪音さはぐなり我まつ君し舟出すらしも　憶良

新　雲まより星合の空を見わたせばしづ心なき天の川なみ　輔親

七夕瀬

後　天河あさきせまでやわたるらむ涙にひぢて袖ぬれつつ　よみ人しらず

詞　たなばたのかへるあしたの天川年に一度わたる瀬なれど　能宣

新　棚機の逢瀬絶せぬ天の河いかなる秋かわたりそめけむ　堀川

勅　天川うき津の浪に袖ぬれて舟ながらにや渡りはてなん　敦仲

七夕津

万　いつしかと舟さしわたせ一年にふたたびあはぬ君まつ瀬々に　読人しらず

七夕渡

古　久かたの天の河原の渡守君わたりなばかぢかくしてよ　仝

代　天の原空なる川のわたりにもなほぞ恋しきこぎかへりせん　洞院摂政

今　棚機は浅くて渡る天川浪たちかへるまで月渡るらし　兼輔

七夕綱

万　牽牛の妻よぶ舟の引綱のたえんと君をわが思はなくに　読人不知

有　天河ひきてもよせよ彦星のとわたる舟の綱手なるらし　宗快

七夕舟

後　水無瀬川あさきせもなし天の川とわたる舟はすみやかにして　よみ人しらず

金　天の川こぎいでし舟になみたちてかへらぬ先に夜ぞあけぬる　越後

七夕橋

續　星合の夕べになれば天川いそぐ渡りに舟はなし橋　國基

万　天川うち橋わたせ妹が家路やまずかよはむ時またずとも　読人しらず

仝　ときまてば衣手寒し天川うち橋わたせ君が来まさむ　読人しらず

詞　いかなれば逢ふとききつる天川あさ瀬に渡る道のたえけむ　たかもち久

勅　天の川八十瀬の浪もむせぶらん渡る夜ごとにたえぬれば　加賀左衛門

七夕紅葉

月　わたの河あまの戸わたる秋風に紅葉の橋や絶えなん　崇徳院

新　袖ひぢて家路に結ぶ天の河星合の空は見えもこそすれ　獻国

七夕池

月　年をへてすむべき宿の池水は星合の影もさやけかりけり　長能

七夕田

續　しらなみのたつ棚機に刈りてほす天の川せに今宵ふねこそ　長家

七夕梶

詞　秋の夜のさぎりのあたりにかぢの葉は織女のさざなみに浮き　為家

七夕鳥

新　織女は今やいづらん天川かきくらしても千鳥なくなり　元任

七夕糸

古　棚機にまつ糸のうち延へて年の緒長く恋ひやわたらむ　美濃

拾　世をわたるてふ糸のまつ程に織女のさゝがにの糸とやまだ見む　読人不知

代　星合の夜半の糸にびかれて絶えぬ星合の空　師光

七夕機
七夕錦
七夕衣
七夕袖
七夕領巾
七夕鬘

万 足玉も手玉もゆらにおる機を君がみけしにぬひあへんかも　読人
月 年経ても何ばかりかは棚機のわくね数をもてわきはしてて　資隆
万 ひさかたのいほはたゝてゝ織布の秋さり衣誰かとらん　読人不知
代 天の川風わたるよは露ちれは織女のおれる錦なりけり　頼政
金 たなばたにかせる衣の露けきにわかれをきと君はしらなん　國信
詞 棚機の衣のわかれを思ひやるかな　しらるゝ　花山院
手 織女に花染衣ぬきかせば暁露のうへもこそ思へ　ぞ　宗於院
月 たなばたの天の羽衣重ねてもわかれ難しや秋の夜すがら　肥後
続 今日よりは天の川霧立ちわたる花染の衣は露の上にやおく　実重
月 ひさかたのくもの衣は重ねきて秋風ふけば袖やぬるらん　左国
代 たなばたの今日こそ織れる袖の名残の　待賢門院堀川　信恵
手 天の川渡る瀬ことに袖ぬれて中々秋はねむるをもがな　兼輔
手 織女の三日はつかの杖にて八十の兵津をもと船出して　俊成
金 棚機のわかれの後も花のかつらぞ人におもひはなれ　師時

七夕枕
七夕焼物
七夕琴
七夕扇
七夕弊
七夕祈
七夕夜深
七夕更明
七夕暁

金 急ぎてしまづぞかへらぬ枕に落つる涙かはかざらなむ　河内
手 棚機の今日の河に寄るかたしけり　しけりとぞ思ふにゝにしらず　中将
詞 天の川よどむる中をせきとめて今年もしばし待つ焼物　顕輔
拾 ことの緒はうちやかひかれ棚機のあふ夜なればしばしとめてぞ　大納言
今 天の河扇の風に雲はれて空すみわたる鵲の橋　元輔
万 天の川かはべ涼しき袖にかぜ吹てこのゆふべ　中務
万 天の河瀬ごとにぬさはたむけなむ君とぞいそぐ寿ませと　読人不知
代 年ごとにいのる中にもまれなりや逢ふ夜とかへらぬ　保光
万 天の川こぞのわたりの夜ふかくは待つらんむ夜ぞ更行る　是実人
月 さしもふかき夜の更けぬるに月をこそあけぬ夜は更まくらん　守覚
拾 まださきに秋の一夜をとらえても明る程は更合の　隆房
代 天の川あらくましくの後にまておくらすは更のうちに　入道前摂政
続 程なくて逢ふ夜の夜のゆねまにもあけてもわかれ下天の衣　経家
代 逢て後にかへるかたはらの枕を見て天の川原の暁の空　隆子法親王

二星別

古 今はとてわかるゝ時は天川わたらぬさきに袖ぞひぢぬる　宗于

続 契りけん程ぞ久しき彦星の年に帰るさのなごりをばいかにせよとかなれ　一条摂政北方

金 天河別にむせぶのこゑぞなかはらのやみぬ　三宮

後 天川かへらんそらもおもはれずたゞあかつきのおもひのみして　讀人不知

新 秋のよの長き思ひをわすれずはたてぬきにねられず　兼好

続 明ぬとて帰るわかれのうらみをもわすれむとおもふ　仁和寺宮

二星惜別

代 彦星の今宵渡の天川とくも渡りてかへるかな　延喜帝

金 渡るかとまつ時またぬ彦星の渡の岸にかへるさの　内大臣

同 ゆるさへ浅せにたかに天川わたれ渡にかへりけり　忠

七夕後朝

詞 天の河ゆくへもしらずわかれぬとまたこんとしの　基仲

続 天川はじめてわたるけさよりもかへるさの袖ぞぬれまさりける　能宣

代 立かへる雲の河風吹かはり行き別れて　師時

八日

古 けふよりはいまこむとしのきのふをぞいつしかとのみまちわたるべき　忠岑

後 棚機のゆくわかれの天川舟よそふる浪のうへかな　兼輔

九日

閏七月七日

七夕祝

七夕庚申

寄七夕述懐

七夕懐旧

二星述懐

後 たなばたのなかぞらのやどれん棚機のあかぬ別の袖は立て　業平

詞 今夜こそ天の川霧たちわたりいかに渡らん　元輔

新 棚機の天川浪立ちかへり今宵ぞわたる　伊実

月 きのふまで思ひしつて棚機のけさの歎に又ゆるぎなき　康保

代 かへりては絶しきぬ彦星のこよひこそ思ひやれ　讀人不知

月 年ごとの今夜にあひて天川ふかくもそめんかさゝぎの　有家

金 萬代に君ぞ見るべき棚機のゆく今日の空の遠ぞき　右近内侍

拾 いとゞしく妹がこひしきたなばたの今宵にあへる　元輔

後拾 いとゞしくまつ夜の棚機のねがひにかはるけふの夜　佐経

古 天川あさせしら浪たどりつゝわたりはてねばあけぞしにける　友則

拾 秋風と棚機のこゝろいかならんわかれんとする　義孝

続 天河星合の空はかはらねどしらぬ秋ぞ恋しき　俊成

新 まちわびて天川まつよそれもしらず　慈円

金 風さへはかなき家遠ざかりのことぞなき　人

萩

万 夕されの吉隠志の原と見る川辺てへかまて袖もしほれ　読人不知

古 秋の川もみぢて出るらん来る人の橋もへてぞ見てたらん　紀

代 かぜさぎの声の遠くれば[illegible]　知家

後拾 さをしかの妻とふ人は萩の上の露をみせて[illegible]　小大進

同 萩の花に人れける風の音は家がしかしへてをりぬらん　実教

詞 萩の葉もなきや秋風吹ねやこゑぞ[illegible]　家長

代 あはれなる萩の上風の音絶えはまされぬ秋の夕ぐれ　雅内侍

今 秋風は萩の上にふくべけれど[illegible]　忠権

新 きのふまでよそに思ひし下萩の末葉の露に秋風ぞ吹く　雅経

新 ふかぬ日のおとにだに萩の上の夕べとぞ聞きて秋をしる　信実

代 大かたの吹く草木はなびく萩の上葉ぞ秋風のふく　雅経

同 夜もすがら萩の上風[illegible]秋風ぞ吹く　[illegible]

古 いづれの風と[illegible]萩の上にそよぐ音にぞ秋はしるらん　貫之

新 吹く風に萩の上葉のこゑぞ秋来ぬと[illegible]　[illegible]

萩風

萩風寒し

萩告秋

後 いとどしく物思ふ宿の萩の上に秋と告げつる風のわびしさ　読人不知

新 いつしかと萩の葉むけの片よりにそよぐや秋とぞ風の聞ゆる　崇徳院

今 萩の上に見えそめし秋風のおとにぞ秋もまさりける　俊成

千 物ごとに秋のけしきはしるけれどまづ身にしむは萩の上風　行宗

代 大かたの秋吹く風は身にしむと世にしられける萩の音かな　長方

新 風わたるいつもよりげに秋は萩の音　和泉式部

代 秋風の身にはしむ夕ぐれに萩の上葉の音ぞ悲しき　基俊

代 萩の上をそよぎて風の音すれば長きよすがら秋の夕暮　左権

今 吹きかへす夜の枕に君ならで覚えず萩の上風　家隆

千 おとろへゆく秋の時雨に萩の上風　雅実

代 [illegible]萩のした風の音　敦忠

新 [illegible]萩の上葉の風[illegible]　宗[illegible]

同 夕暮は萩ふく風の音まさる今はたいかにね覚せらるらむ　具平親王

萩知秋

初花萩

萩花高し

関萩

暁萩

月前萩

風前萩

夕萩

夕萩風

荻似人来
聞荻恋人
山家荻風
暮天荻
閑庭荻
故郷荻
荒宅荻
籬荻
暮秋荻
寄荻述懐

野 夕されバ荻の葉むけ吹風にことぞともなく涙落けり　後徳大寺
月 荻の葉に風おとづれぬ夕暮ハ音せぬよりもさびしかりけり　俊恵△
代 心にも包てもの忍ぶるハ荻のうはこゆる秋の夕風　西行△
付 秋のよハ人まつとしもなけれども荻のうは風に音ぞまたるゝ　顕季
仝 荻のはに風のふくなる夕暮ハおとづれぬ人も涼しかりけり　法性寺入道
有 さまざまの思ひあらむ山里につまぞ吹かる荻の上風　定珍△
詞 独寝て待る宿の荻の上に風こそ渡れ秋の夕暮　[illegible]
月 とふ人もなき山家の夕まぐれさぞ聞ゆる荻の上かぜ　貞憲
物 蔵秋の風の音かと恋ねらん絶えず聞ゆる庭の荻原　朱宗
代 来ぬへて我まつ人のまつる古への荻のとこそ秋風ぞふく　経信
仝 さびしさに秋の色をそへてかわれる宿の荻のうはかぜ　讃岐
付 風の音に驚く荻のこゑこそは秋の色とは知られけれ　小大進
月 ちりのゐくらそへねる庭の面に小萩の枯葉の音ぞ残れる　大輔
千 いふかせもいせの浜荻みだれつゝ波にまかせて枝の波にまかする　忠けけ

葛
社頭葛
葛風
暮秋葛

萩

萩盛

萩未開

新 神まつる三室の山の葛かつら吹返し秋やきぬらん　家持
古 ちはやぶる神のいがきにはふ葛も秋にはあへずうつろひにけり　貫之
新 独のみいとどさびしき山ざとの軒端にかゝる葛のうら風　顕綱
代 風さそふ秋くるまでの葛の葉のうらみてのみや人をたのまん　元輔
万 少女らが今のかざしにかさはやに萩の花のさかりなりけり　読人不知
仝 言つくハ秋さりくれば寄せくらむ秋萩花咲にけり　仝
物 白露のおきしも上に萩が下紅葉衣にうつる秋はきにけり　[illegible]
代 鶉鳴ふるさとの秋萩咲すさび白露のおく野辺の夕暮　衣笠内府
付 秋来れば朝ふしもに萩のこゑこそ寄る方もなくて見えける　花山院
金 小萩原まだ盛りにはならねども寄る人も見えけるまさり　りうゑ△
物 さゆくれの夢にかれける城野のかあらの小萩花盛　小弁
古 萩の露玉にぬかんと取ればけぬよし見ん人は枝ながら見よ　読人不知
付 鳴るゝ一の浅茅落つくん払ふ宿の萩のうは風かな　仝
拾 うつろはむことだにをしき秋萩を折れぬばかりもおける露かな　伊勢

萩上露
萩露滋
萩露落重
萩露如玉
月前萩
夕萩

勅 軒まではとみえん萩花さく宿の露にてやれぬぞぬる　浄助
六 はてもなく風の渡るや秋萩の下葉よりうつる露と消えなん　不儀讃人
代 道芝の露のみにおり秋萩や枯れたくさの袂なるらん　道助△
万 さを鹿の朝立つ野べの秋萩に玉と見るまでおける白露　家持
仝 秋の野にさける秋萩秋風になびける上に秋の露おけり　仝
古 折りてみば落ちぞしぬべき秋萩の枝もたわゝにおける白露　読人不知
後 秋萩の枝もとをゝになりゆくは白露おもくおけばなりけり　同
後拾 人しれず物やかなしき秋萩のねたるがほにて露ぞこぼるゝ　中納言女王
代 花もなく露もしづくと見ゆるかな露のまの萩原しのぎ行合　鎌倉右大臣
万 秋萩における白露朝な朝な玉とぞみゆるおける白露　よ実今良
代 妹萩まこゝろ玉は嵐の手にもたまらぬ露のかずかず　覚寛
後 歳経て後見よとやみん霜やどりつぐ野べの秋萩うづく月影　源家長
新 庭にのみかはるのこ萩咲しより月影ふかき庭の月ぞ移ろふ　摂政
代 白露のいざみえんまでは萩が花散る秋の夕暮　後徳大寺

夜萩
風前萩
雨中萩
田中萩
朝田萩
萩花思萩
小野萩
折萩
愛萩
翫萩
萩花移袖

後拾 まだ宵にねたる萩かな同じ枝にやがておきゐる露もこそあれ　新左衛門
代 消えぬまに見えける秋萩の露吹き乱る風の夕暮　大弐三位
月 秋の野のまだしげしとも萩の枝とをゝに露やおきける　躬恒
月 秋風は数くとも吹けども散る野の尾上の萩はちるらん　家持
仝 さをしかのねる野風寒しさをしかの野辺の秋萩ちるらん　為家
続 わかれぬる人に見えんまがきの花わかの小萩ちりぬらん　も鈍
代 梓原のなさしぐれて時雨野原の小萩花盛りなり　基俊
月 さを鹿のしがらみふする萩原の山の萩原咲きにけり　小弁
後 何事ぞ人はまだ見ぬにわれも秋萩の　俊成
拾 宿ごとに見てあらはれぬとも秋萩の花　美作守
新 秋萩を折らでは過ぎじ月草の花ずり衣露にぬるとも　永縁△
後拾 六 ちらさじとをしみて下すうへの秋萩露の　源公△
六 妹萩咲見る秋萩の下葉は庭の妻にぞ　読人不知
月 をりばかり袖にうつろふ夜さへやはこぼるる萩がはなずり　覚照△

代 宿ちかき小萩が末にたちぬれば花ゆへ衣きぬ人ぞまたるる　下野

萩下ニテ待人

芳 秋若の萩咲ならちらぬまにきませとそ思ふ人をまちつつ　読人不知

萩叢隠人

代 はしたかの身よするらし秋萩の花のしげみの下にかくれて　仁和御製

仝 とへかし庭の秋萩今さかり花より後はかれもこそすれ　権寺

野萩

拾 とまりゐし人をまちつつしめゆひし野辺の萩原花さかりなり　恵慶法師

芳 秋風は涼しく吹ぬる野べにいさ妹とかりいん萩の花ずり　読人不知

湯野萩

続 秋の野の萩の錦をきそふれば袖もうつろふ萩の花かな　家隆

代 たかまどの野辺の秋萩咲にけり見せばや人に園の秋萩　為氏

草径萩

後 ゆふ露にそぼちてかへる道の辺の秋萩すれる衣手の色　貫之

有 小萩咲野べとなりけり旅人のすりころもしるき野辺の秋萩　定邦

萩隠ス草径ヲ

代 たちかへり分くる野原の小萩原花のしらたまみだれてぞゆく　経信

芳 萩原のうへをわけ行人の袖ぞ露けき秋の野のはら　左大臣

古郷萩

続 ふるさとのもとあらの小萩いまよりは見る人もなく咲やちるらん　鎌倉右大臣

代 ふるさとの萩の下葉にのこりけり昔の人の袖の移り香　忠信

旧宅萩

後拾 ふる郷にゆきてみれども浅茅原君なき宿の秋萩　伊勢大輔

庭萩

後 我宿の庭の秋萩散ぬれば後見ん人やくやしと思はん　宗于

隣庭萩

拾 おのづから萩のをりしもとなりより庭にうつろふ秋萩の花　逢親

名所萩

代 宮城野の本あらの小萩露しげみ野辺のかはらの萩末ぞこぼれけん　光俊

路行萩

有 草枕旅の衣に移りにし野辺の秋萩のしの萩もあはれ　定家

旅行萩

拾 きてみれば小野の夕暮立ちのぼり見えてたちそふ秋萩の色　遠房

依ニ萩廻ル路ヲ

代 分くれば萩の小萩咲みだれ人の袖にうつろふ花の色かな　経季

有 ちるさとに錦にそへし萩が本をとりかへしむる野辺の秋萩　鎌倉右大臣

田家秋

芳 秋田刈る仮庵の宿の萩ぞうつろふ秋萩の色もあはれなる　内大臣

恋情寄萩

代 いとどしく咲く萩の花の小山田の宿の秋萩の露　読人不知

秋風在萩上

詞 しかのおく宿に見する萩が枝に秋風さそふ人の家の色　前摂政

代 我宿の萩の下葉のうつろへば秋の風こそ身にしみけれ　周防内侍

惜萩

芳 秋風は日にけに吹ぬまでの野辺の秋萩ちりもこそすれ　左大臣

萩欲散 三下

萩露風

萩花落

野萩稀

萩下葉

女郎花

万 秋の野に露おへる萩は手をらずてあたら盛は過ぐしてん　家持

後拾 起露にまさしも枝ぶふにもてはいそがはらん吉和の秋萩　長能

万 我園の秋萩の花風はいたくな吹くそちらねえん人かたみ　大伴卿

今 さ萬原すびく秋風吹くごとにわがこの大野の萩が花ちる　読人不知

拾 萩が花の寄せぬ程へどと見てしかなと萩の花いちるやと　季廣

代 鹿まとひ白露おきて立る宿の野辺の萩原うつろひにけり　右関白

千 萩はまさに夜もすがらうつなべて小萩の下葉ひとつうつろひにけり　読人不知

代 梓弓春書おしほ小末小かうさまの萩も下紅葉して　伊勢

古 花の色を見ゆるとも人こそしらね萩の下葉ぞ染まされる　貫之

古 妹の名に誘ふなりは女郎花我とも君に棲てえすは　忠岑

今 秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花もひと時　遍昭

後 女郎花たれのわざきれば秋にのこる花わひとくられ　読人不知

拾 秋の野に宿りはすべし女郎花名をむつまじみ旅ならなくに　全

後 こゝろみに家路にはうとく花にむなしくやさらに　読人不知

女郎花露朝 秋十六

女郎花初開

庭隣女郎花

風前女郎花

女郎花随風

女郎花移栽

野女郎花

又女郎花

拾 こゝにしも何匂ふらん女郎花人の物いひさがにくき世に　遍昭

後 秋ならで逢ふことかたき女郎花天の河原に生ひぬものゆゑ　定方

新 朝織にまよふ地に女郎花秋をちかみかうつろひぬらし　美材

秋 誰ゆへにかの山の女郎花秋とちぎれる人ぞあるらし　小野小町

古 秋岩にたゞ咲ける女郎花秋はさらなる妻よさぞくらん　智經

古 人の見ることやくるしき女郎花秋霧にのみ立ちかくるらん　忠岑

今 女郎花吹き過ぎてくる秋風はめには見えねど香こそしるけれ　躬恒

代 何とすく咲き過ぎて秋風にいとゞうちまさる露もさえぞし　經基

代 わびて野の色にたちそふ秋風よおとさぞくる女郎花かれ　基俊

古 女郎花ならびくと見れば秋風の吹きくる末にまつさきから　雅定

金 ほどなくし秋の野風にうちなびき心ひとつは誰によすらん　左大臣

代 女郎花たのむ風にあやうくして心ざし白露にかゝる　攝政

後 白露のおかる野原の女郎花花にしみ慕ふまでぞかれる　読人不知

後 まつべし花の盛りは秋風の吹く夕暮は誰にかぞ経る　右大臣人

終夜見女郎花

拾　日ぐらしにみれどもあかぬ女郎花野べにやこよひ旅ねしなまし　能宣

夜女郎花

後　女郎花ひる見てましを秋の夜の月の光ハ雲がくれつゝ　読人不知

[illegible]

女郎花帯露

後　秋の野の露におかるゝ女郎花はらふ人なみぬれつゝやふる　読人不知

拾　[illegible]　貫之

今　白露の色は[illegible]女郎花[illegible]　読人不知

続　[illegible]女郎花[illegible]　経忠

女郎花歎露

代　[illegible]女郎花[illegible]　季廣

女郎花多し

金　女郎花[illegible]　俊忠

古　[illegible]　[illegible]

甚落女郎花

続　[illegible]女郎花[illegible]秋の[illegible]　兼覧王

野亭女郎花

後　[illegible]女郎花[illegible]　貫之

金　[illegible]　隆源

野女郎花

古　女郎花おほかる野べにやどりせばあやなくあだの名をや立なん　美材

拾　秋の野の花の名たてに女郎花かりにのみこん人におらるな　読人不知

金　あだし野の心もしらぬ秋風にあはれかたよる女郎花かな　公実

六　女郎花一もと故に秋の野の[illegible]　兼昌

金　白露や心おくらん女郎花色めく野べに人かよふとて　顕輔

籬中女郎花

千　吹風に[illegible]女郎花[illegible]　行家

旅宿女郎花

勅　[illegible]　讃岐

名所女郎花

代　[illegible]　安藝

後　女郎花匂へる秋の武蔵野はつねよりもなほむつましきかな　貫之

山中女郎花

続　[illegible]　親隆

古　をみなへしうしと見つゝぞ行すぐる男山にしたてりと思へば　布留今道

岡女郎花

拾　舟岡の野中に立る女郎花わたさぬ人はあらじとぞ思ふ　読人不知

岸女郎花

内　[illegible]の岸に匂へる女郎花[illegible]　雅兼

水辺女郎花

後拾　[illegible]　堀川右大臣

池辺女郎花

代 うつろはじ池のさゝ浪に枝ひちて物思ふ袖のぬるゝ顔なる　季廣

折女郎花

千 手にとれば袖さへにほふ女郎花この白露にちらまくもをし　能宣

今 をる人の心にかよふ女郎花いろにはいでゝなにぞうつろふ　躬恒

拾 秋の野の花の名たてに女郎花かりにのみこん人にをらるな　小野宮太政

霞女郎花

拾 霧わけて女郎花をみる心地してさかりにうつるあきの野辺かな　輔昭

翫女郎花

古 名にめでゝ折れるばかりぞ女郎花我おちにきと人にかたるな　遍昭

拾 我やどに植てぞみまし秋の野にさきしにほひをまづ人にみせん　よみ人しらず

古 女郎花秋の野風にうちなびき心ひとつを誰によすらん　時平

女郎花留人

拾 女郎花おほかる野辺にやどりせばあやなくあだの名をやたちなん　読人不知

古 秋の野に宿りはすべし女郎花名をむつまじみ旅ならなくに　由性

信宿女郎花

今 花にあかでなど河辺の遠ければ見し人ごとに野辺をすぎけん　貞文

後 ひとりのみながめてかへる女郎花花のいろ秋はうくともやどりをやせん　兼輔

拾 まだきより咲にし人のうつろはゞこゝにくらせと野辺にすみつつ　貫之

惜女郎花

古 たが秋にあらぬ物ゆゑ女郎花なぞ色に出てまだきうつろふ　貫之

後 秋霧のはれぬあしたの女郎花たちかくれんと思ふばかりぞ　兼覧王

代 花におもふ心とゞめて女郎花うつろひまさる人やわかれん　帝王

寄女郎花懐旧

新 いにしへをしのぶる人にいはまほし女郎花秋ぞしらすや　清輔

物 女郎花折れるたもとの白露に人はとふらん秋のあはれを　三条太政大臣

寄女郎花述懐

新 女郎花さかりの色をみるからに露のわきける身こそしらるれ　紫式部

薄　尾花同

古 今よりは植てだに見じ花薄ほにいづる秋はわびしかりけり　貞文

拾 秋風にまねく尾花の花薄ほのかにみえし人ぞ恋しき　躬之

後拾 宿ごとに風のふけばや花すすきまねくかたへは人ぞこえける　經衡

千 花薄まねくはさすが知るらめど人の見ずしてすぐるなりけり　忠命

物 さらぬだにおもひ出ぬ花すすきまねくぞ人の心ならずよ　長方

月 秋風の吹ぞしらるゝ花薄まねくと人をまたぬかりけり　季経

後 花薄ほに出しまゝに風ふけば思はぬかたになびくとぞみる　仁勝

月 秋風にまねく尾花のかげ見れば露もちくさにたまやなれるる　読人不知

栽薄

薄出穂

初尾花
風前の薄
薄随風二
薄靡風二
薄露

代 手枕すゝき宵ぞ結ばん初尾花秋のきぬらんいでとおもへど　隆祐
有 閨のうちのひともしら露におきそまりくばられぬ秋はきにけら　範輔
拾 秋風にそよぐ袖ら花薄いかにせすともまねくなるらん　土御門内大臣
新 野辺ごとに吉ながれてる秋風にわたりならびく花薄かな　六条
六 花すゝき風ゆかびそよぐは結び置そし露やこぼれん　後京極父
金 夕日かげの風のつきに花すゝきたなびくあけぼのうつる秋をもよせ　読人しらず
続 花薄まねくがらせばいのちしそ秋の野風のきよしかりけり　尾張
有 宜かすゝき秋の野風にまびきつつまつほにまねく花薄かな　讃岐
有 吹ぬまもまねく穂こそ花薄風に傾くやとみえん　貫之
六 ますくなくとそきよるはなく花薄たなびく風のちるやうら　九条太政大臣
代 さらぬ露のおくらるゝ花薄ほに出て風に靡きぬるかな　行宗
新 花すゝき秋の末葉にみだれつゝたとのれなくそまりぬる　藤原秀能
金 たちのゝ小野の風ふかき花薄露に出そだいれつゝ露かなねる　藤原清輔
有 花薄ます露涼しきに出そはゞめど秋の寺らを　式子内親王

夕薄
尾花浪寄浪二
薄似招袖二
名所尾花
野薄
園薄
野径薄
古宅薄
閑庭薄
庭前尾花

新 しるしきや草の秋や花すゝき露わけわくは秋の夕ぐれ　具親
新 小倉山檜の野べのくれ落る葉の穂にゆる秋の夕ぐれ　読人しらず
古 つゞくのちぢさの園の花薄ほのまねく沖津しら浪　信明
金 うづら鳴まの入江の浜風に花薄あきつさなるら秋の夕ぐれ　俊頼
拾 どうせんしたる野べの花ぞそれいだれとさしてまねくらん　ふるき人もまねきて　読人しらず
六 秋の野の露をすらにこそ花薄まねくをみるに招ねきたる　時房
続 秋の野に出わたりける花薄まねく袖のあれの人　い寸
有 色かはりつゝ野べはほのかにまねく袖の浪のよるまに　美作守
金 風そよぐ花すゝきの園の花薄すがた浪のよとる　太政大臣
続 一家のことゝて花薄りなく人とまねくやかて　孝清
古 君が植し一村薄の虫の音のしげき野べとは来しにけり　みなもとのありすけ
代 おほかたの宿にはうへし花薄まねくにとまる人しもあれば　任
新 まねきてそ植し薄の一むらとみれね庭ぞ荒まさりぬる　信実

暮秋薄

拾 まねくとて立もとまらぬ秋ゆへにあはれかたよる花すゝき哉　好忠

い わと見てかへるへかりける花薄まねくも秋のなごりなるらん　恵慶

月 いは風に尾花か末はむすほゝれせて暮行秋をしたふらん　宗尊

続 とゞまらぬ暮行秋のなごりとてまねく尾花の袖ぞ露けき　仁覚△

月 暮行秋のしたふらんとてまねく花ときくまれし　釈基

男 人皆は萩を秋といふよし我は尾花が末を秋とはいはん　読人不知

続 秋風にすゝき露と知らぬ哉ゆふべの露に立とまる　能季

千 謂みてうかふ鶉の床のゆふくれ　俊経

月 雉子なれぬ霞ぞ花すゝき床の上に人のしのふる野辺の千原　俊頼

玉 しるしてう草葉の上に秋風のなかに立てる野べの色　甲斐

たなそへ いろ〳〵に見えつる秋の夕風に野べの尾花は　読人不知

続 ぬる夜はあけの露に秋風の白露を濡る袖はまそ　大武三位

代 ほのかには見ゆ尾花か末の夕べのあはれに露こぼれて　備家女

新 牽されば籬にかけてある尾の上の秋風にみだれて　三河内侍

杜鵑居刈尾花

尾花留人

苅萱

風前刈萱

苅萱帯露

夕刈萱

古籬苅萱

寄苅萱述懐

たまかれどなほ恋しきを刈萱のみだれてのみや思ひわたらん　読人不知

蘭

古 宿りせし人のかたみか藤袴わすられがたき香ににほひつゝ　貫之

今 ぬししらぬ香こそにほへれ秋の野に誰がぬぎかけし藤袴ぞも　素性法師△

月 何人か来てぬぎかけし藤袴くる秋ごとに野べをにほはす　敏行

続 ねまきもしらず藤袴きる秋ごとにたれかぬぎけん　道経

代 かなしきのありかもしらぬふぢばかまにほひに人の袖ぞしらるゝ　平忠幸

金 佐保川の汀にさける藤袴なみのよるとやかけてほすらん　忠季

月 かくる人もなきにや藤袴秋の野ごとに露のたゆらん　伊通

千 さくらのものとや藤袴きて見る人のあきぞ露けき　能仲

後 藤袴きる人なみに立ちよればねらしのたれの　読人不知

新 かくしてもとまりはてゝあさかやの色のそらにほふ　公猷△

朝 なき人の藤袴ゆかしき香こそふりける　隆源△

勅 つゆけきや野辺のふぢばかま誰が形見にかほひけん　能輔

六 ぬき人のかたみに藤袴むかしの香こそ咲てたえ　藤原仲実

水辺蘭

砌下蘭

蘭花昇

雨中蘭

蘭露

野蘭

折蘭

槿花 朝顔同

代 はかなくのちりにかゝる蕣ぞまた君が為にと手折りけるかな　嵯峨天皇

新 おきて見んと思ひしほどにかれにけり露よりけなる朝顔の花　好忠

拾 たれかかくかれぬといふらん秋霧の絶まに見ゆる朝顔の花　後徳大寺左大臣

今 朝顔の花に宿れる露の身のほどなき物は何にかはせん　紀貫之

月 よそに見る朝顔の花のうつろふを待つまのほどぞおもひ知らるゝ　宗于

代 いつまでかかゝる露けき身の上に心をよせて朝顔の花　さかの上

垣槿花

月 風ふかで人まつ籬に咲きそめていつしかやつる朝顔の花　定家

代 かきねのみ結ひまはせる槿は花のひとしき朝顔の花　花園左大臣

今 世をとひてうきこそまされはかなくも朝顔の花　忠房

朝顔路辺

拾 絶まなくおなじ朝顔見えつゝ花は咲ける露の朝顔の花　後京極

山寺朝顔

有 朝顔の花に宿れる露の身のはかなき世にもあひにけるかな　家尚

寺院槿花

新 山がつの垣ねにさける朝顔はしのゝめならで逢ふよしもなし　貫之

暁見槿花

古 わればかりはかなきものはなしと見し朝顔の花の露のうへかな　友則

朝顔の歌

古 秋の月もさすらむと見えたるは露に結ぼる朝顔の花　読人不知

草花

月 秋萩のふる枝にさける花の色に見れば折るてふ枝はさびしき　讃岐

代 はるゝまの花の匂ひはとにかくに人のこゝろも秋のしら露　長方

今 わがせこが衣の裾を吹きかへし秋の野風にかゝる露かな　後徳大寺

草花告秋

金 咲きそむる萩の下葉のうつろふも今ぞ秋風のさかりなるらむ　雅経

千 秋きぬと風を告げてや山里に秋の七種の花ぞ咲きける　輔親

待草花

金 蕣のゆふかげまたでちりにける秋のはなにも似たる世の中　美濃

続 いとゞしく秋の野風に移ろひて萩の下葉の色ぞかはれる　能季

草花告秋

千 秋の野の花の匂ひにあくがれて乱るゝ心いかにせよとか　宗法院

露草花

新 露しげき野辺の花見にゆく人の袖ぞ濡るゝ秋の夕暮　堀川右大臣

有 風よりも露にぞしをる秋の野の一枝をだに折らで過ぎにし　実房

草花乱

今 さきみだる花の色々見るからに秋の野風ぞ心にはしむ　親任

代 いかばかり花にかゝれる露なれや秋の野風のたえずふくらむ　傅経

朝見草花

有 朝露にぬれつゝ花をみる人はいとゞ秋の心をぞしる　為遠

夕見草花

古 夕されば野辺の秋風身にしみて鶉なくなり深草の里　俊成

遥見野草
代 秋の野は花もとも萩原紐おちてかつかつ花ちる　後徳大寺
近對草花
続 秋山の裾野まで見ゆるは末野の萩ぞまさりける　伊勢
風前草花
後拾 吹風にたへずとよむ女郎花我身にしみてかつ乱れつゝ　慶暹
風動草花
新 ひとりねの夢の枕に秋風を枕定めぬ秋風ぞ吹く　良平
月照草花
今 つく月の光に見れば秋風に乱れて咲ける萩の下枝　紀伊
月下草露
続 いく野のちぐさの花にうつろへる月の影こそ秋のなかけれ　道経
雨中草花
月 萩が花しほれぬれて紐ときに露ぞこぼるゝ月影　忠度
草花帯露
続 雨ふれば色をまさりて咲く花も置く露ながら今宵ねむらむ　雅季
草花帯露開
後 植ゑて見し花の盛りは過ぎぬとも露と消えて秋の萩　い町
野花帯露
月 置く露にきゆる女郎花つゆながら萩が花摺り別れむ　道基
野花露
金 白露と人はいへども野辺みれば置く花ごとに色ぞかはれる　肥後
池辺草花
千 秋の野の千種の色にうつろへば花ぞ色そふ池の深き　二条院讃岐
水辺草花
月 さらぬだに汀にまよふ花薄はなびく池の波のよすがも　元真
後拾 水の面に花の影さへうつりては千年の秋の例とぞなる　能宣

草花
古 吹風に萩が葉のそよぎにも秋のなかりせば野辺の花を見む　能宣
今 秋の野に咲きたる花を指折りてかき数ふれば七種の花　山上憶良
萩の花尾花葛花なでしこの花をみなへしまた藤袴朝顔の花　同
秋草花
古 糸すすきひとつ草とぞ思ひしを秋は色々の花にぞありける　よみ人しらず
月 秋の野の千種の花の色々に心ひかるゝ人もありけり　直兼
秋草欲開
詞 秋の野の花見る時ぞ色々にわが心まで乱れける哉　よみ人しらず
社頭秋花
拾 神垣にかゝると聞けば朝顔のはかなき花も頼もしきかな　赤染衛門
野花
後拾 秋の野の花の色々思ふより見て過ぎがたき袖の露哉　堀河院御製
同 さらぬだに秋の野末はあはれなるに花咲く野辺の夕暮の空　ちゝ天人
思野花
今 女郎花多かる野辺に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ　小町
家持 さを鹿の朝立つ野辺の秋萩に玉と見るまで置ける白露　家持
後拾 秋萩の花咲きにけり高砂の尾上の鹿は今や鳴くらむ　敏行
女郎花なまめき立てる姿をやうしろめたくも見捨てて行くらむ　則　卿

野径草花
野花嫁露
栽秋草
庭移秋草
庭尽移花
家移野花

後拾
野辺見ればいとゞ秋の野の花の色もかはらで 良暹
代
いとゞしく見えてぞ秋の野の中にかゝる 惟成
詞
さらぬだに秋の野の花のたちまちかはる 雅経
六
秋の野は花のかげにて見えかくれ 兼輔
秀
さきそめし宿の花こそかれぬれ 摂政
千
みやこの花は宿に移して 元真
新
はかなしや花の色にかへて 関白内大臣 [redacted]
続
秋草に移して庭の花に見ゆ 朝忠
後拾
家に秋の野をうつせば人にみえて 彰家
玉
たが宿の花にうつす庭のまがき 勝命
月
野辺ちかくうつして花を見る 信輔
こ萩原宿にうつし植て庭の色にまがふ 肥光

野亭萩花
野花留人
秋草留人
野花留客
尤見秋栄
惜秋草
寄秋花懐旧
霜題

新
さらぬだに秋の野の花の名にたてて 家宗
新
秋の野の花のこゝろをしりて 大輔
代
秋の野の花の色にもあかず見る人の 経基
千
萩の花わけてかへる人の 三位内侍
金
いくとせか花の色ぞ見る 花実
後
秋の野の花はなにとなく 忠岑
今
ともし火の花の色をしる 後撰
続
植置し人の心の秋の花 読人不知
秋
秋草の庭の花ぞ見る 基忠
新
色かはる秋の花のなごりに 家持
千
古郷の花ぞうつろふ 清輔
物思ふ袖より露やならひけむ秋風吹けばたへぬものとは 後京極摂政
物思ふ袖より露やならひけむ秋風ふけばたへぬものとは 寂蓮

秋露

秋露重シ
妹露袖濡シ
朝露
朝露如玉
夕秋露
夜露
深秋露

新 露ハ袖に物思ふころハさぞなおくかならず秋のならひならねど　太上天皇
今 [illegible]白露の何[illegible]ひかり[illegible]　乙麿
万 [illegible]の秋風寒し萩の花ちらしてや白露おきてかへらん　よみ人しらず
後 から衣袖ぬるゝまでおく露ハ我身を秋の野とやみるらん　忠岑
千 草木まで秋のあはれをしのべばや野にも山にも露こぼるらん　恵慶
詞 秋ハ皆思ふことなき萩の葉も末たわむまで露ハおくめり　和泉式部
代 露しげき庭萩[illegible]風よ玉ちる秋の夕ぐれ　師光
月 みな野辺の露の[illegible]風に玉ちる夜の露のおきかれぬる　仲実
今 朝露の園の[illegible]山風よくぞ袖ハ秋ぞしりぬる　後鳥羽院
後 秋の野に置く白露ハ見れバ玉やちるらんと[illegible]　[illegible]
新 [illegible]夕露を袖のおとにひかる[illegible]　越前
続 しをれ[illegible]露の上にとまれば[illegible]秋の夕露　堀川
後 露[illegible]もの[illegible]くらきわれ[illegible]　読人しらず
代 [illegible]露の[illegible]草葉に風[illegible]暁ちかく[illegible]　元真

露お[illegible]夜玉
露如玉
月前露清
野露映月
月照草露
露寒シ
露晩シ
秋山露深
嵯峨山露深

新 秋の夜はをくる月の光にハ置きそふ露をおきとめん[illegible]　読人しらず
続 玉[illegible]消ぬる露と置[illegible]　和泉式部
万 秋萩の枝もとをゝにおく露の[illegible]月ハ[illegible]　読人しらず
千 河[illegible]秋の[illegible]月の[illegible]　親盛
新 秋の夜ハ宿る月も露ながら袖にいでたる萩の上風　通具
月 風ふけバ玉ちる萩の下露に[illegible]月ぞ[illegible]　法性寺入道
物 浅茅原葉末に結ぶ露ごとに光をそへて宿る月影　親盛
今 [illegible]月の光きよみ[illegible]露の[illegible]　兼宗
今 妹の[illegible]露[illegible]　[illegible]
代 [illegible]の月　峯[illegible]
六 [illegible]の[illegible]　為経
代 [illegible]秋萩の[illegible]露の[illegible]　貫之
後 [illegible]露の[illegible]浅茅が[illegible]　有[illegible]
新 世[illegible]露の[illegible]　守[illegible]
新 秋風に[illegible]浅茅の末[illegible]白露のきえ世中　蝉丸

雨後露
風前露
庭前露
庭草露
閑庭露滋
假庵露
故郷露
野露

万 中々にあればかなしき萩の尾花がもとの白露 よみ人しらず
月 風ふけば露おきまさる萩原の萩のうへ葉の露ぞこぼるゝ 定頼
代 夕されば秋風吹て高砂の尾上の露の玉と散らん 具家卿
月 秋はなほ萩の下風の露けさに露のこぼれて袖のぬれつゝ 俊成女
六 露しげき庭のまがきの草むらに虫の音ふかく秋ぞ更ゆく 行能
新 庭の面の茂る蓬にことよせて心のまゝにおける露かな 基俊
万 秋田守かりほのいほり露しげみ衣手さむし露ぞおきける よみ人しらず
古 山田もる秋のかりほにおく露はいなおほせ鳥の涙なりけり 忠岑
後 秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつゝ 天智天皇
六 君すまぬ昔の宿のふる里に秋の草葉の露ぞ深けき 貫之
後 秋の野におく白露の消ざらばよしや袖にもかゝらましやは 読人しらず
全 梓弓春の生野の秋萩はいつしか露のおきまさりけむ 忠見
後拾 秋の野はいはゞ花にやまがふらん露のしげきにあはれ消なんとぞ思ふ 觀範

野径露滋
淺茅露
野草露
野草露滋
草上露
草露如玉

代 袖ぬれし撫子の花のまのせくれ萩のしたつ露 式子内親王
古 秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくる蜘蛛の糸すぢ 朝康
後拾 さゝがにのすがく浅茅の末ごとに乱れてぬける白露の玉 長能
古 ゆふさればひぐらしさとかせくさむらの下露は置にけり 良暹
新 分入れば露わけきえて行人の秋の野はまだ袖ぞぬれける 恵慶
代 秋といへば契りおきてや結ぶらん浅茅が原のけさの白露 定家
金 茅原の小野の浅茅におく露は草葉にかゝる秋の夕ぐれ 長実
新 古の葛たる露の大野の白露をふきみだる秋の夕かぜ 顕宗
新 秋の野の草葉おしなみおく露にぬれてや人のたづねゆくらん 長實
後 露ながら尾花に結ぶくずの葉の露はひかりてあかし深ける露 忠國
後拾 いかにして玉にもぬかん夕されば萩の葉わけにむすぶしら露 為家
新 秋風に吹かれぬべしよしろ露の乱れておける萩の葉の露 大式三位
後 秋の野の草葉にかゝる白露はいくたび玉とぬくらん 貫之

露ハ草葉玉

六 しら露のひかるわけのはらふべし花にも葉にもおもひぞかゝれる　堯孝

内 秋の野は萩の下えにおく露は錦にまじる玉やかゝれり　兼輝

後 草の葉におく白露と見えつるは秋の涙べる露にぞありける　守文

代 秋の野は萩の露とも見ゆるかなちくさのいろにむすぶしら玉　忠任

叢中露

詞 妹が家の草村ごとにおく露はゝる鳴虫の涙なるべし　好忠

ちくさの露

千 ながれてしも秋の花さへの野露をぬきみだしたる玉とぞみる　小大進

篠露

新 岩井くむわたりのさゝ原しげりつゝ露よりみだれ秋の夕露　入道前関白

葉上露

後 ものおもふ木の葉にかゝる露の涙よりも月の影ぞもりける　読人不知

全 おくらくにちくさの花にむすぼれて露とのみこそ人のいふらん　全

袖露

内 いまの秋のこゝろにおもへばいかる露のきゆるこゝろ　於朝臣

於すゝし 朝ごとに置く露袖にうけためて世のうきときの涙とぞせし　同

い 大空に我袖ひとつかゝれどもおくは露やいつまで逢らん　於すゝし

い 我袖に露ぞ置くなる天川雲のしがらみ浪やかゝるらん　全

金 しら露の玉の萩原露すがりわたる袖ぞ人まちがほに　長実

袂露

露ハ世人涙

新 妹の家のいとまのかはに袂にはわれしらず人の露の夕ぐれ　長明

勅 一家袖は草の庵にわかれどこえわかれし露のおもかげや今宵　業平

千 はるゝまは我袖の上にかゝれば袂にかゝる秋の夕露　堀川

勅 唐衣ぬせど袂の露ながら我身の秋にすむかぜぞ吹く　読人不知

千 夕ぐれは萩吹風の音きくぞ袂よりこそ露はこぼるれ　季経

い 大方の露には何のなるならん袂に置は涙なりけり　圓位

代 秋の野に狩ぞおきける白露は独寝人の涙なるらん　い勢

全 たぐひなき秋の夕ぐれ露にぬれて流るゝ袖の露かな　具平親王

旅宿露

草枕露ふかき宿

後拾 旅衣袖をぬらすは野辺のゆふ露なるか涙なるらん　範永

千 旅衣野辺の露しげく置くはわが袖のしづくなりけり　忠通

後拾 さらぬだに旅の衣に露をせし秋の寝ざめの草まくら　隆家

金 秋ふかき草の枕に置く露はたびにあらぬ人のまぎるゝ　長実

千 旅の寝覚め夕露ふかくわけくれば萩が花ずり旅の草枕　為忠

別路露

勅 東路の野路の草葉の露ぞしぐれとまるも袖ぞぬらさぬ　朝康

霧中露
山中露
山路露
草花露
海辺露
草秋露
寄露祝
寄露懐旧
寄露述懐

後 草枕ゆふて斗は何なれや露も涙も置かへりつゝ　左大臣
新 ふし馴ぬ笹の葉枕ならぬ露の袖やはしをれぬ一夜斗に秋の山路に　民部卿家
代 さとゆすりが袖かる山のかはらぬにしをれて山下露にぬれつゝ　家隆
万 ぬばたまの黒髪山の朝露に山下露にぬれつゝそゆく　読人不知
後拾 いかなれば萩の朝露かゝればしをれし袖の露はけぬらん　素意法師
新 秋の野の草葉の露を払ふまで玉敷床に月ぞやどれる　家衡
代 女郎花露のなごりのおきかへる花の露けき秋の夕暮　遠保女
後 ねざめする秋しもあれば白露の千種における玉ぞみだるゝ　清正
続 花といへば秋の末葉の露をわけて我ぞ先みる花ぞこひしき　行宗
金 君が代は松の上葉に置く露の積りて四方の海となるまで　俊頼
新 吹むすぶ風は昔の秋ながらありしにも似ぬ袖の露かな　小町
千 契りおきしさせもが露を命にてあはれ今年の秋もいぬめり　基俊
新 世にふれば憂さこそまされ露の身のきえぬ斗ぞ袖にかゝれる　鎌倉右大臣
後 秋風のふくにつけてもしのぶ世の人めをつゝむ袖の露かな　読人不知

秋風

初秋風
驚秋風
秋風如涙
秋風涼
秋風漸寒之

新 秋くれば常磐の山の松風もうつるばかりに身にぞしみける　和泉式部
新 野原より露のゆかりを尋ねきて我衣手に秋風ぞ吹　太上天皇
古 しられけりむべこそ秋はかなしけれ秋の風吹く身にもしむらん　左京大夫
代 浅茅原秋風吹ぬ哀またいかに心のなぐさめとせむ　家隆
仝 吹そむるいづれの野辺の秋風に人の袖まで露けかるらん　伊勢大輔
月 あはれいかに草葉の露のこぼるらん秋風たちぬ宮城野の原　後鳥羽院
後拾 うちそよぐ荻のはかぜにおとろけば秋のけしきぞ身にしみにける　新宮
千 夕されば野辺の浅茅吹風の音ぞ寂しき秋の夕暮　摂政
新 たる園の梢の葉末さはぎそめてかつ吹初る秋の初風　基俊
新 萩の葉にそよと吹ける秋風の涙もろなる夕暮ぞ憂き　入道前太政大臣
後拾 萩の葉にそよぐ音せぬ秋風は人こそしらね身にはしみけり　読人不知
後 秋風のふくにつけてもとはぬかな荻の葉ならば音はしてまし　同
古 我せこが衣のすそを吹かへしうらめづらしき秋の初風　仝
代 秋さればきりの梢の秋風の吹くに我身の露けかりける　重之

嶺風寒し

夕秋風

夜秋風

野秋風

野外秋風

古 たかさごの渡しもしらぬ夕べ秋風寒く吹ぞきぬなる　讀人不知

後拾 しらしく駒わたる夕暮に秋と覚ゆる風ぞ吹なる　通俊

月 夕まぐれさゞ波よする峰の風の音まことぞ夕にすぐ秋　重保

六 おくらん秋の夕べの袖しきぬいとど嵐の風や何まち　讀人しらず

代 大方のうき身に聞もたへぬべし夕暮ごとに秋風ぞ吹　為家

同 夕されば野辺もはるかにふく秋の[illegible]そよ秋風ぞ吹　為綱

ら 秋風の身にしむ野べの[illegible]の色の沼や[illegible]　時村

へ しらつゆの[illegible]の秋風にいたく[illegible]　讀人しらず

続 吹しほる野べの秋の露にいかにかな[illegible]と萩の上風　顕昌

古 秋風の吹と見ゆるむさし野は[illegible]て草葉の[illegible]　基俊

千 身にしみて結ぶ秋の野にさびしくぞ風の音　定家

同 秋にわへ[illegible]の萩わすれつゝ[illegible]の風の音　伊信

代 浅茅生の小野の篠原打なびき音するつれなく秋風ぞ吹　

い 音せぬ野べの草木は[illegible]

野分

野徑秋風

山秋風

深山秋風

林下秋風

沼辺秋風

河上秋風

池辺秋風

海邊秋風

濱秋風

木林秋風

千 野わきする野べのけしきを見る時は心なき人あらじとぞ思ふ　季通

新 むさし野やゆくへも秋の果ぞなきいかなる風の末に吹らん　通光

古 紅葉せぬ常盤の山に吹風の音にや秋を聞わたるらん　淑望

物 [illegible]の奥の秋[illegible]　り忠

代 沼わかれ[illegible]の奥に吹風は秋すれどもきえせり　忠良

同 宮園の萩すりおろし夕風に野路の笹原[illegible]　和泉式部

新 秋くればといふ[illegible]の松風に揺る汁にかぞ[illegible]　好忠

今 林風の[illegible]吹わたる音羽山河の草木のそよぐ[illegible]　忠昭

物 わたる川せの[illegible]　経光

代 [illegible]の浜の秋風[illegible]の波　美作

古 緑なる松と林風吹[illegible]沖つしら波　上総

代 [illegible]の秋の秋風浦風[illegible]　宗仲

新 打よする波の音[illegible]の浜風秋の[illegible]　経衡

同 [illegible]木の葉の秋[illegible]

関路秋風

代 いくかへの雲の秋風に川音さへ身にしみねらん　通具

後拾 都をバ霞とゝもに立しかど秋風ぞ吹白川の関　能因△

新 秋風の関吹こゆるたびごとに声うちそふるすまの浦なみ　忠見

旅宿秋風

千 河とほく拗で結びき秋風の身か其夜の旅寝なりけり　仁上△

新 さらぬだに秋の旅寝はかなしきに松に吹なり床の山風　秀能

旅路秋風

〃 旅人の袖吹かへす秋風に夕日さびしき山のかけはし　定家

山路秋風

〃 初瀬山夕越暮て宿とへば三輪の檜原に秋風ぞ吹　禅性△

故郷秋風

有 秋風ハ葎の門はさしくとも荻の葉ずゑハ訪ふ人もなし　有房

代 玉鉾の道の芝草うちなびき古き都に秋風ぞ吹　後鳥羽院

田家秋風

金 夕されバ門田の稲葉おとづれて葦のまろやに秋風ぞ吹　経信

付 君まさで山田のひたにたゞくゝ吹秋風にまかせてぞふる　頼家

新 秋くれバ朝けの風の手を寒み山田のひたをまかせてぞきく　忠房△

〃 つきそむる庵ハ見えずに聞る秋のかぜ　慈円

続 雲かゝる田面の庵の夕されバいすゞの川に霧の立ぞする　為家

山家秋風

有 夕まぐれ岩の門田に聞ゆやこれや分かた山秋の松風　雅経

後拾 山里の柴の枢のさびしきにわがおもひいでゝ風の音せ　範永

幽居秋風

新 松に吹嵐にまさる都にも秋はさびしきこそあるらん　後徳大寺

庭前秋風

代 霧しげき蓬がもとの白露に夜も枕に秋風ぞ吹　寂蓮△

新 我宿の尾花が末の白露の置し日からぞ秋風の吹　家持

舟中秋風

代 さゝなみの舟どに増るなかの風にかゝる舟の綱さし　好忠

松上秋風

続 浪よりの来る松風の音にぞ秋は身にしむ　中務

代 松風はいかでおとすらん秋の夜の稲葉そよがせ我がかへるく　具平親王

竹風似雨

後 まつの音に風のしらべをまかせては竜田姫こそ秋はひくらし　忠岑

同 白露に風の吹しく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散ける　朝康

林風驚老

代 秋風の吹にそゞろぞ身にしみる世に老ん事はかなしき　恵慶△

草木秋風

後拾 荻の風に吹おくる音にも秋こそ深くなりにけれ　長能

万 秋風の寒く吹なへ我宿の浅茅が本にこほろぎ鳴くも　読人しらず

虫

古 秋の野に人まつ虫の声すなり我かとゆきていざとぶらはん

聞虫声
叢虫
終夜聞虫
思虫
虫恋
虫催
虫声寒シ
夕虫

拾 契りけんむかしもしらぬ我秋の夜に人まつ虫の声の絶せね　読人不知
月 鈴虫はみちの露のをとめてもなく虫の音ぞ浅茅が宿ぞ深き　長方
代 朝な朝な秋の野ごとに鳴虫は浅茅が露で深草の野　上総
拾 おぼつかないづこなる虫の声ならん草の露にぞ濡れけれ　為相
古 家居する秋の野にわけ行く人の虫の音は宿も定めず　後入道
代 峰虫の都の空にいざ人の思ひのよそに身をかへて鳴く　少将
古 秋の夜は長くもあれど鳴く虫は哀れなれど物思ふ人の　敏行
詞 蓬生の荒れたる宿は秋ながら虫の声をも聞かるらん　永保
代 我ならぬ人に告げばや秋の夜に虫の音をきく　為敬
朝 秋風は露を浅茅に峰虫の声ぞ悲しき夜半の空かな　正通
代 蝶ならば虫の音も我が思ひを鳴く夜を待つ　花山院
今 去年よりも大野に峰虫の声の秋の夕暮　土御門院
内 宿近き秋草どもの露の下に鳴く虫の声　元長
後拾 浅茅生の秋の夕暮鳴く虫は我がごとものや悲しかるらん　藤原基

夜虫
寒夜虫
深夜鳴虫
夜静虫
暁虫
終夜虫鳴
寝覚聞虫
月前虫

代 我宿は露にぬれても虫の音の夜な夜な身にしむる秋の声　伊平
手 結ぶ草葉を寝ねがてに夜を重ねつゝ鳴くは悲しき　読人不知
代 今宵虫の鳴く声さへも夜をかさねて峰の空　兼宗
古 秋の夜は宿こそ離れ鳴く虫の声ぞ世を秋の夜半の空　忠良
新 秋更ぬなけや霜夜のきりぎりすやゝ影寒し蓬生の月　太上天皇
代 頼めつる人も来ぬ夜の虫の音を聞けば寝覚の床ぞ悲しき　中院入道
今 鈴虫の声の限りを尽しても長き夜飽かず降る涙かな　和泉式部
い 家居する鳴く虫の音にわびつゝ寝覚めの空ぞ悲しかりける　小宰相
続 終夜秋の野に鳴く虫の音に聞えて遠ざかる峰　隆祐
新 年経ても聞けば虫の声は変らぬ　三河
代 寝覚めする袖さへ寒く秋の夜の嵐吹くなり松虫の声　家隆
月 露ふかき枕の下の虫の音も夜もすがらの寝覚めをぞする　季清
照る月の影さへ寒き宿に鳴く虫の音や　前関白

待月聞虫声

雨中虫

風前虫声

露底虫

虫声悲

虫声添

虫為夜友

虫声似人来

勅 さびしの山端にまつ月影は浅茅が露にまつ虫の声　以衡

万 庭草に村雨ふりてこほろぎの鳴声きけば秋づきにけり　読人しらず

代 庭草の露の数そふ村雨に夜深き虫の声ぞ悲しき　鎌倉右大臣

後 秋風の吹なるよひは萩原の露のみだれに虫ぞなくなる　読人しらず

新 虫の音もかれ／＼になる野べにおく露もみだれて松風ぞふく　家隆

自 露けさは荻吹風に分わびぬ虫の音にさへ涙こぼるゝ　佐

続 浅茅生の露吹むすぶこがらしに乱れてもなく虫の声かな　但馬

新 跡もなき庭の浅茅にむすぼゝれ露の底なる松虫の声　式子内親王

詞 鳴虫のひとつ声にもきこえぬはこゝろ／＼に物や悲しき　和泉式部

新 いくよへし浅茅が原の虫の音を誰とひてかはきかんとすらん　良経

後 秋の野にきてなる人も聞人もいかで涙の露にしほるゝ　読人不知

続 虫の音ぞ草村ごとにみだるなる誰か寝覚めのとも無き夜半　とし宗

代 よそにても鳴声しるき虫の音に友待ねやの秋ぞ悲しき　相模女王

今 我せこはきませてとまれ小夜ふかく人まつ虫の声ぞ悲しき　和泉式部

遇友聞虫

野虫

寒野虫

満野虫声

叢中夜虫

草虫

浅茅虫

虫縁草深

六 [illegible]　忠見

古 秋の野に道もまどひぬ松虫の声する方に宿やからまし　読人しらず

六 妹の野に人まつ虫の声すなりわれかとゆきていざとぶらはむ　貫之

代 虫の音も乱るゝ秋の野べにやどりして夜を明すかな　忠見

後 秋の野の草むら吹かば露寒み声もかれゆく松虫ぞ鳴　よみ人しらず

有 秋風や夜寒になればはかなくも虫の音いとゞよわりゆくや　有家

後 秋くれば野もせに虫のおりみだる声の綾をば誰か着るらん　元真

詞 ちとせやとま村ごとに鳴なる松虫の音をふくらむ　道命

後 風寒み鳴秋虫の涙こそ草葉色どる露とおくらめ　読人しらず

古 われそ後は何せん浅茅生に秋こそ人は松虫の声　敏行

後 秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきりぎりす鳴　在原棟梁

後拾 女郎花多かる野べに松虫をしのびて誰とまつらん　読人不知

古 女郎花の花のひもとく夕暮に千世まつ虫の声ぞ聞ゆる　元輔

古 人のいふるとやまと女郎花たゞとふ松虫の声　美ソ子

川邊虫
山中松虫
古寺虫
故郷虫
古宅虫
幽居虫
草庵蛬
荒庭蛬
庭夜虫
閑庭松虫

月 芝踏と淀野の草に蛬なかなくねもきこえ　仲頼

拾 とふ人も今はあらしの山風に人まつ虫の声ぞ悲しき　讀人不知

代 ふるくの宿の津の前は荒れにけり松虫の音ぞおもひしらるる　醍醐天皇

古 君しのぶ草にやつるるふるさとは松虫の音ぞかなしかりける　よみ人しらず

後拾 ふるさとは浅茅が原と荒れはてて夜すがら虫の音をのみぞなく　道命法師

同 あれにける人のわかれし年経てかへるかなしの鈴虫の声　四条中納言

代 すむ人もなき宿ならぬ秋の根みえて絶ずも鳴る浅茅生の　左京大夫顕輔

千 宿荒れて逢ふ人もなき虫の音はよもすがら絶えぬ人の露けき　紫式部

新 人はこで風に木の葉は散りはてて夜な夜な虫は声よわるなり　好忠

玉 草の葉に露ぞこぼるる虫の音は松虫のおとなふ人ならば　いせ

全 いまこむといひし人は松虫の声のみ聞くはかなしき　素性

詞 秋風に蓬の宿に鳴く虫の声を夢のごとくぞきく　惟人

万 夕月夜心もしのに白露のおくこの庭にこほろぎ鳴くも　湯原王

古 あれにける宿の庭にぞ松虫の声ぞわびしき　よみ人しらず

前栽放虫
草原虫
園虫
閨虫
床前虫
壁間虫
枕辺虫
旅宿虫
古寺聞衰虫

拾 いづくにも草の枕を鈴虫はここを旅とも思はざらなん　いせ

後 秋くれば機織る虫のあるなへに唐錦にも見ゆる野辺かな　讀人不知

代 秋くれば風の音にぞ蛬草の庭にいつくに鳴くなり　高遠

続 ちぐさの秋にわけ入る花の園をたづね来て鳴く松虫の声　肥後

月 秋の夜の閨の中なる蛬いはまぞ草のねにたち鳴くなり　覚延

千 蝉の声に夜はあかぬ暮にとどめて蛬すがるの声　花山院

代 蛬床の中にぞ声のする蓬が杣は風ぞ寒き　忠岑

全 ひとりぬる枕の宿にしのぶとは誰の鈴虫の声ぞするなる　基俊

金 やどもる人は壁にすだく蛬の枕の下に鳴くなり　六条

詞 古にかへらぬ秋の鈴虫のいる人の世の夜すがら　為仲

月 ふるさとの夜に寝ぬ蛬の枕に音ぞかなしき　兵衛

同 わびしきは旅ねにしもの夜に鳴きしける草まくらかな　寛平

後拾 秋風に声をあはれに鈴虫のなきふるさとのいかにぞあらん　匡衡

千 松風の音とともに虫の声に秋の夜ふかき物ぞかなしき　大蔵卿

白露映秋花
虫声稀
聞秋虫
虫声惜秋
松虫
鈴虫
蛬

新 蛬夜寒に秋のなるまゝによはるか声の遠ざかりゆく　西行ム
仝 秋風にみだれて野べの花よりも虫のねいたくみだれぬる哉　具平親王
六 蛛風の夜吹しくば蛬むべ蓬の声ぞよわるらし　慈円ム
月 迎へくるさとへは秋の叢中いたく虫ぞなくなる　時文
続 秋ふくる粟りとの虫の声はゆくへしぞ家のうらなる　宗光女
月 り秋を押しとめる山の虫の声に家さへ紬はね　読人不知
後 きりぎりすいたくななきそ秋の夜の長き思ひは我ぞまされる　小野美材
新 万代の秋はまちきく鳴きぬるに宿に松虫のこゑ　貞子内親王
代 まつ人の声ならねども松虫の千代とすすむる声は聞こゆ　園融院
付 人を知らで露なる松虫の一夜に千代をかそへなるとて　五条后
六 秋の野に家まつ虫の鳴くといふぞ経まづ花にこそは　貞任
後拾 年を経る秋にあひぬる鈴虫のふりすゝ小夜の増れども　貞
仝 とゞまらぬ秋をしらせて鈴の虫ふるとゆきる鈴虫の
千 秋はてさむくも消ゆるさこそ嶺てらすまきるこゑの果　堀河

佗織
寄虫述懐
寄虫懐旧
蜩
萩花待鴈
鴈遠

金 くずのはにすゞくる草むらにはてある虫の声ぞきこゆる　顕仲女
六 陰がの羽風は夜寒になりぬらんまく声のするとまく　上東門院少将
千 数わらばいまするせん世を知ね虫のふ秋は鳴かに社宇　和泉式部
新 紬と萩の上葉の露分けて吉れぬ虫の音ぞする　知足院入道
古 日ぐらしの鳴く山里の夕暮れは風よりかにとふ人ぞなき　読人不知
付 ひぐらしの帰りぞする夕ぐれの身にぞあはれの道まそ消えなる　仝
後 秋風の草葉そよぎて吹くなへに声を消のもつるひぐらしの　同
〃 ひぐらしに鳴り流るゝひぐらしのいつまで袖の秋をかれせん　とも
〃 ひぐらしの声はいとすゞしく秋の夕暮にきくやかなら　権大納言
〃 ふぐらしのさへなきにけりひぐらしの声のきこゆる山の入日に　豊之
拾 鶯声はらくひぐらしの声すゞしくなれといふのくだれど　〃
新 日ぐらしの鳴く夕暮ぞうらけるいはんや旅にせねばひぐらしのなくの　藤原道
後拾 名ひとへきれ花こそにれさ鴈の啼声を待せぬ萩の錦は　御製
六 人もれね露の鳴く秋萩の上葉ぐくまでに鴈の声せぬ　よみ人

鹿

鹿声朝秋

鹿去近枕

関鹿

万 夕されば小倉の山に啼鹿のこよひはなかずいねにけらしも　舒明天皇

今 鳴わたる秋は萩ねとさは鹿の鳴らむ声のうらふれにけり　よみ人しらず

拾 さは鹿の声とまれでも鳴都のいつかたきこゆ萩原は

古 秋萩の花咲にける高砂の尾上の鹿は今や鳴らむ　としゆき

い 妹の野に妻よぶ鹿の来ぬはてゝわが家のうへと鳴　らいひと

後拾 秋は猶我身ならねど高砂の尾上の鹿も妻ぞこふらし　能因△

拾 萩の花さくかしはすぐ声の鳴ね花はおのがれ事なし　能宣

続 けさまでの鹿の声に枕萩の下葉は見てや我に来つ覧　経衛

代 声ぞ鹿ぞ鳴する秋萩蘭の花の夜の露ぞ紅葉　為氏

松吹く嵐 さをしかの鹿のとまる声をきくからに秋は恋しき枕と知らせて　好忠

金 秋すぎて萬よぶ鹿はゆふしぐれわからぬ我身はたのむらと　りあ

新 ともし火は枕に近き秋の夜の鳴さかしかの声　慈円△

後拾 鹿の音の小秋は出でたる外のとの乃松は孫ありどし　源

拾 まどろまぬいでて萩の鳴さめんと秋の夜の長きとふ　松浦武静

朝聞鹿

毎朝啼鹿

夕啼鹿

暁更鹿

夜聞鹿声

新 聞人のまどゐせぬ鹿の声は家妻をこひ忍て鳴らむ　出羽弁

新 妹がうき紅葉の衣のくれなゐに小鹿の鳴鹿の声はら　顕昭

万 さ牡鹿の朝ふくかぜの足引の山とよませ棹鹿鳴なり　家持

新 さゝ萩のまの萩原咲しらぬ紀伊の鹿の鳴ね日は　基綱

千 棹鹿の妻とふ声をいつまでか夕べはつまや紀伊の鳴く覧　修紀

付 かくまでは見ても秋は恋しきと鹿の声紀伊の人をとひや　道因

今 ふぢとりし妹の夕暮は鹿の声の紀伊に朝夕の袖ぞ覚　政平

松吹く嵐 我住みかに立つ月の暮の鹿の声をいふ萬をそ流る覧　俊恵△

代 さる秋の松ふかれ浮き夕暮に鹿の声をそれそ秋風ぞ吹　忠良

金 心なきと思ひ鳴きの月影に見しそなる秋の夜にかれず　太宰小

千 山里の暁方の鹿の声は秋の夜の長きに見ずもや　慈円△

代 岩と山中夕月の鳴鹿は尾上の萬に萬もまど悲る　雅光

い 吉田山暁は覚き秋風に紅葉ふく鹿の嶺らむ　小宰相

金 秋の夜のすくれて我は鹿の萬するの声　兼昌

深夜聞鹿

終夜鹿声

寝覚聞鹿

月前鹿

風前鹿

千 棹鹿の鳴音は野べに聞ゆれど涙は床のものにぞ有ける　忠岑

代 独ゐてよはすがらなる秋のよはたれに寝覚をさそひ鳴らん　資季

今 これなきに寝覚はいかに秋風の戸に吹よはは鹿ぞ鳴なる　小宰相

千 秋の夜は月にまかせて鳴鹿の声のみ聞てあかしつるかな　輔仁親王

新 山おろしに鹿の音たかく聞ゆなり尾上の月にさ夜や更ぬる　入道左大臣

代 妻こふる棹鹿の音に小夜更て我かたらひと思ひぬる　小町

後 鳴きとむる妻ならなくに棹鹿のなくしも独鳴らむ　読人不知

代 秋ことにならひし月のよそにぞきく鹿の音　俊頼

後拾 鹿の音ぞ寝覚の床にかよふなる小野の山べにすみやしぬらん　家経

新 寝覚して久しくなりぬ秋の夜は明やしぬらん鹿ぞ鳴なる　道済

続 月のうき影の鹿の音にさそはれて嵐の後の山端の月　季通

勅 棹鹿の鳴音にいとど更にけり月にもえこそ　如願

代 鹿の音の立山本に月とよくふるかぞ　慈鎮

拾 秋風の打吹ごとに高砂の尾上の鹿の鳴ぬ日ぞなき　読人不知

鹿声比風

鹿声比嵐

雨中鹿

鹿隠霧

霧中鹿

千 夕されど荻の葉に吹風はさびしくも又鹿の鳴なる　正家

金 妻こふる鹿ぞ鳴なる独寝の床の山風身にやしむらん　大進

代 はげしさの程ぞしらるる棹鹿の妻よぶ声に風ぞそひける　入道摂政

拾 立田山紅葉ぐれ鳴鹿の声も秋風ぞふく　忠信

今 秋風の吹夕暮は真柴山峯も尾上も鹿ぞ鳴なる　基俊

手 三室山おろす嵐のさびしきに妻よぶ鹿の声たぐふなり　肥後

代 秋風に露そふ岡のおのへより棹鹿の声　宇治関白

新 さらぬだに松の梢は淋しきに嵐にたぐふ鹿の声かな　惟明親王

今 聞人の嵐の声にまがふなり夕の鹿のなく　摂政

勅 峰に鳴鹿の声こそ聞ゆなれ嵐にたぐふ秋の夕暮　経信

新 下紅葉かつ散る山の夕時雨濡てやひとり鹿の鳴らん　家隆

代 夕月夜暁方の霧かくれ鹿ぞ鳴なる　家政

万 此ころの秋の朝けに霧隠り妻よぶ鹿の声のさやけさ　読人不知

後拾 小倉山立ども見えぬ夕霧に妻まどはせる鹿ぞ鳴なる　侍従

朝鹿

野鹿

新 をしかの羽る梢らす小夜ふけて高師の山に鹿ぞ鳴なる　鎌倉右大臣

拾 小倉山林葉は[illegible]夕暮に[illegible]のへぞ[illegible]秀　西行

代 [illegible]峰の鹿の夜は[illegible]ての人ぞ[illegible]　土佐内侍

新 流れくる葛が原に鳴鹿ハ根ての[illegible]まる　信恵

万 秋萩の[illegible]る野べのは梓鹿ぞ[illegible]鳴る[illegible]　讀人不知

仝 妹萩の咲る野べのさは鹿ハ[illegible]鳴[illegible]せ　仝

古 妻こふる鹿ぞ鳴なる女郎花おのがすむ野の花としらずや　躬恒

千 いつ計[illegible]る[illegible]の[illegible]ねると野の草ば　忠見

続 [illegible]萩の[illegible]る[illegible]秋の野原に[illegible]鳴[illegible]　如権

野夜鹿

閑鹿

代 鹿の音やいま[illegible]ハおもはん[illegible]ば　静蓮

付 咲わたる小萩が原の[illegible]ハ野風[illegible]鹿ぞなくなる　[illegible]人丸

万 よ[illegible]の秋萩しのぎ鳴鹿の妻とふ[illegible]るる　基良

代 家園にさ[illegible]鳴[illegible]萩原と[illegible]しる　大伴卿

[illegible]の秋風[illegible]鹿ぞ鳴なる　後鳥羽院

田家聞鹿

千 そのへちか門田に早秋風に稲葉そよげる梢鹿の声　寂蓮

新 山里の稲葉の風に寝覚して夜ぶかく鹿の声を聞かな　師光

新 秋萩にちりかゝる露に鳴鹿の声[illegible]や山田もる庵　讀人不知

代 小山田の庵ちかく鳴鹿の音におどろかされておどろかすかな　西行

仝 家門の板井をくるや山田に里遠しよか萩の鳴らん　信実

樹有鹿

古 風まぜに小村さめ降て外田のすゝの葉ぐれに萩まくや　輔忠

鹿交萩

古 秋萩をしがらみふせて鳴鹿のめにハ見えずて音のさやけさ　讀人不知

代 とハ又ものがほならぬ家園の秋萩しのぐ鹿の鳴く覧　菅氏

鹿鳴杜萩

千 宮城野の萩や鹿の妻ならん花咲しより声の色する　基俊

名所鹿

新 後撰 秋萩妻こふ鹿の鳴こゑに小萩が原の露ぞこぼるゝ　後忠

後撰 宮城野小萩にまとふ鹿ぞさわぐなるむかしの萩に宿や　忠能

六 あきち手を会の山にて鹿の音をきく[illegible]　[illegible]人丸

続 [illegible]しの野べに立鹿ハ妻さだまらね[illegible]鳴[illegible]　隆光

旅宿鹿

金 さゝ枕ハ都[illegible]き旅ねする鹿の[illegible]秋[illegible]　仝

籬萩

新　旅ねして暁かたの鹿の音にいなばおしなみ秋風ぞふく　經信

續　宮城野の小萩が末にとまるとは鹿に宿かる花ぞこぼれし　仁和寺宮

勅　春日山森の下道つゆ分て秋寂まされぬ棹鹿の声　後京極

島鹿

六　鹿のねの右にきこえて鳴鹿の声きけばにしはまつ鳴かぬ　讀人不知

夜泊鹿

代　高砂や松の梢に吹風の身にしむ時ぞ鹿も鳴なる　增基　△

千　みなせ川みなとの鹿にきこゆなり生田の奥の棹鹿の声　範兼

金　うたゝねの覚るいまに湊に吹あらし鹿の音おろす峯の松風　隆源

付　夜はてゝぬるのせとはつぎぬれば遠にきこゆる棹鹿のこゑ　俊惠　△

い　湊川夜舟こぎ出る追風に鹿の声さへせとわたるなり　忠円　△

遠近鹿

万　秋萩の散のまがひに呼立て鳴なる鹿の声のはるけさ　湯原王

勅　大江山遠ざかる鹿の音はいく野は越て妻をこふらん　實守

詞　秋萩を草の枕に結ぶ夜はちかくも鹿の声はきこゆる　伊家

鹿聲兩方

代　床ちかくいづかたの尾上にも枕にきこえて棹鹿の声　公實入道

千　宮城野の小萩が末をとりかへば鹿の音ばかりきこゆる　覺延

鹿聲繁

万　山のべにいゆきさつをは多かれど山にも野にも棹鹿鳴も　讀人不知

山鹿

拾　紅葉せぬときはの山に住鹿はおのれ鳴てや秋を知らん　能宣

金　世中は秋果ぬとや棹鹿の今はあらしの山に鳴らん　顕仲

勅　あさぼらけ山家ちかくり秋風にみだれぞ鹿の妻をとふ声　知家

山中夕鹿

付　秋萩の枝しほれと鳴鹿の声きく山ぞ紅葉ちるらん　家持

代　棹くれは霧の中に鳴鹿は人にしられぬ妻やこふらん　政郎

新　我ならぬ人も哀や増るらん鹿鳴山の秋の夕暮　土御門内大臣

暁聞山鹿

千　山へとおもひし鹿の音は猶うき家ゐせらるゝ　良清

い　さびしさは何にたとへん棹鹿の鳴涼しの里の夕暮の空　廣言

代　暁に草もぬれんとぞ山鹿の鳴音に月ぞふけぬ　基俊

山家聞鹿

古　山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴音に目をさましつゝ　忠岑

續　山里は霧立こめて人もなし鳴立鹿の声計して　通俊

山家夕鹿

千　さびしさに夕べさびしき山里の霧の籬に鹿ぞ鳴なる　堀川

山居鹿

後　秋ふくる山にぞひとり家ゐして鹿の鳴音をまぢかにきけば　經信

深山ノ鹿
深山夕鹿
深山暁鹿
棹鹿
山路ノ鹿
閑庭鹿
嶺鹿
鹿声留客
古寺聞ノ鹿
鹿声驚ス夢ヲ

代 人もなく澤たえたる山里に秋見えの鹿の声のみぞする　恵慶△
古 奥山に紅葉ふみわけ鳴鹿の声きく時ぞ秋は悲しき　読人しらず
新 野分せし小野の草ぶし荒はてゝみ山に深きさを鹿の声　寂蓮△
代 山深き秋の夕べはさびしきにいとゞ心をそへて鹿ぞ鳴なり　頼能
内 夜を寒み深山の秋の暁にたれかわかれと鹿も鳴らむ　道助親王
新 妻こふる鹿の音きけばさびしさをそへて秋風ぞふく　忠房
勅 ひとりのみ思ひてぞ行山路には鹿ぞ鳴なる　道信
い 棹鹿の鳴り谷のほとりにあさぢふにさそ妻はこふらん　知家
後拾 秋霧の晴せぬ峯に立鹿は声ばかりこそ人に知らるれ　大弐三位
勅 暮日山山おろし秋霧の上にぞ鹿の声聞ゆなり　[illegible]△
代 見えくるとはや峰に鹿鳴てを花にさそ野への秋風　為家
今 山のべにつら色ぞまさる大原の小野の萩にすがる鹿や　仲実
い 鹿の子の小萩に秋はやましらど寺の将の夜は寝覚まさる　二条太政大臣
新 さく鹿の声に覚えてまどろまぬ夢も覚ねば妻の秋の思ひと　慈円△

鹿声催ス涙ヲ
寄鹿述懐
草村鹿
社鹿
秋晩鹿
水郷秋鹿
山田秋鹿
野秋望

手 鳴まじくしく秋のねざめの夜の声きくは寝覚そめぬ　秀能
新 高砂の尾上にさそ鹿の声の小雄のかにも夜寒の秋の霧　恵慶△
代 きく人の袖ともなれば鹿の涙ととにおける露　以任
手 世中よ道こそなけれ思入る山の奥にも鹿ぞ鳴なる　俊成
新 つゆてり秋の野辺に棹鹿のなくが聲しらぬかな　長家
代 [illegible]秋を悲しき嵐ふく小松が峰に鹿の鳴なる　宗于
拾 [illegible]秋の山べにうつりて[illegible]鹿ぞ鳴なる　観意△
今 川霧の棹鹿さへ見てさねさまは見し夏の秋の山は見えずなる　深業
千 秋風のおとにうら小野に[illegible]　宗輔
新 棹鹿は宇治の川霧たちて[illegible]絶ゆる網代木　以実
い うつら山松の嵐にかよふ波せばわくる田面に秋風ぞふく　俊成
月 [illegible]萩が花ぞ散る　右大臣
代 いざゝらば山本遠く見渡せば尾花末に変る松の村立　土御門院

山路秋行

秋興

新 秋風の袖に吹まく峯の雲を翅にかけて雁も鳴也 家隆△
仝 立田山秋行人の袖をみよ木々の梢はしぐれざりけり 慈円△
同 都にも今や衣をうつの山夕霜はらふ蔦の下道 定家
此山路やいかならむ秋の夕まぐれ見ざらむ人の袖の白露 慈円△
万 鶉なくふりにし里の秋萩を思ふ人どちあひ見つるかも 山部赤人
仝 白露ははらへばきえていざ子ども露にきそひて萩の遊びせん 読人不知
同 女郎花秋萩しのぎさを鹿の露わけなかん高まとの野ぞ 家持
い 秋の野に今こそゆかめもののふの男女の花にほひ見に 仝
古 吹風の色のちぐさに見えつるは秋のこの葉の散ればなりけり 読人不知
拾 朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき 公任
千 さを鹿の入野のすすき初尾花いつしか妹が手枕にせん 読人不知
仝 いはばしる草の色に染れとも袖からかるき萩が花ぞちる 長覚△
新 見しをりの秋の野べをば花薄まねくとてこそ来つれとぞおもふ 頼輔
古 ねせてやはおもひ出の菊の香は見ぬにいはせて年ふるかな 崇徳院△

山中秋興

河辺秋興

田家秋興

山家秋興

秋夕

秋夕色

秋夕月

古 神南備の三室の山を秋ゆけば錦たちきる心地こそすれ 忠岑
千 ちはやぶる神代もきかず竜田川から紅に水くくるとは 業平
千 秋の田に紅葉ちりける山里をことぞともなく過ぎにけるかな 躬恒
新 物のあはれ門田の稲の秋風に何ともなくて夕暮ぞ鳴 宗通
代 ともすれば三室の山田に雁鳴て夕日さびしき秋の村里 道慶△
後拾 さびしさは秋の梢に紅葉して麻柱に見えゆく秋の山里 中将
後 夕暮のさびしき物は萩の花おのれもあるにおもほえゆる 読人不知
代 さびしさに宿を立出てながむればいづくも同じ秋の夕暮 良暹△
仝 蝶の舞ふ花のうつろふ杜のうへにそれ故はやき秋の夕ぐれ 定嗣
後 誘はれば秋にかき物と知りながら独ぞねぬる秋の夕暮 隆信
い 何ごとも思ふ物はつひにしらざりき秋の夕暮 寂蓮
い 物思ふ人はおのれとさきそめて蕾ひらきの秋の夕暮 信実
新 ほととぎす鳴くやさつきの秋の夕べの萩の花の夕露 後京極
新 月の夕べに染まりて独むかへる萩の花の夕露 良暇△

秋夕風

代 夕日に又まがふ色なき夕べより因幡の山の秋風の聲　俊成女

今 うすき衣手寒き松風に秋の夕べぞしらせぞいふ　式子内親王

勅 旅とて見し袖ぞ露けき山端にいざよふ雲の夕暮の空　摂政

秋夕雲

新 秋ぞしる雲の夕べは袖に色つけて見られ秋の夕暮　今

旅夕露

い 露けさはすぎにしその秋ぞとておぼえなき袖の露かな　園房

山寺秋夕

後拾 入相の音をきくもさびしき大原山の秋の夕ぐれ　寂蓮△

深山秋夕

新 さびしさは宿をも出でゝながむればいづこもおなじ秋の夕暮　良暹法師

村雨の露もまだひぬ槙の葉に霧たちのぼる秋の夕ぐれ　寂蓮

野径秋夕

い いとひても猶いとはしき世なりけり吉野の奥の秋の夕暮　家衡

森秋夕

千 夕されば野べの秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里　慈方

海辺秋夕

代 人の秋の夕べのさびしさをいづくにか見む秋の夕ぐれ　恵慶△

浦秋夕

今 いせ島や一志の松原見渡せば夕塩かけて嵐ぞふく　入道前摂政

新 見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮　定家

旅所秋夕

代 吹くからに風の音こそさびしけれ里は秋の夕ぐれ　上東門院□□

山居秋夕

代 さびしさに堪へたる人の又もあれな庵ならべむ冬の山里（秋のゆふぐれ）　雅経

関路秋夕

続 山の端に夕日のかげは残れども関の戸さゝぬ秋の夕暮　範兼

里秋夕

代 ひとり見ておもふもかなし秋の夕べの野べの夕暮　前摂政

千 何となく物ぞかなしき菅原や伏見の里の秋の夕ぐれ　俊頼

故郷秋夕

代 いにしへをしのぶもかなし津の国の難波の里の秋の夕暮　家隆

今 山里はもとより人にうとけれど秋の夕べぞ独りすむ　梅宮女房

澤秋夕

新 心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮　西行△

同 見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕べを　定家

秋夕情

代 おしなべて思ひしことのかずかずに猶色まさる秋の夕ぐれ　良経

旅夕思

新 なべて世のはかなきことを思ふにも秋の夕べぞ身にしみける　摂政太政大臣

羇夕傷心

代 いかにせむしづのをだまき秋の夕べに何をかくらむ　道兼

秋夕催涙

今 たへぬとてかならずしもなぐさまぬ秋風の夕ぐれ　実信

同 露けきに我が身をせめて涙ぞおつる秋の夕暮　少将

い 家々にまたもあらじな秋の夕べは我が涙ぞ秋の夕暮　前太政

雨後秋夕

代 ふりぬれば露そひまさる夕べとて秋こそ人にしをりけれ　前中納言

稲妻

金 さく浪寄にそよぐる心の花のとぬし秋の夕ぐれ　信實

後拾 秋の夜は山田の庵に稲妻の光のみこそもりあかしけれ　伊勢大輔

新 世中は何にたとへん秋の田をほのかにてらす宵の稲妻　よみ人しらず

新 風わたる浅茅が末の露にだにやどりもはてぬ宵の稲妻　有家

同 秋の田のかりほの庵の月清み宵の袖に人めかるる宵の稲妻　家隆

六 よそにのみ聞しにかはるものとはや秋の田のこ[illegible]かからん　讀人不知

金 秋の田の月のあかるの稲葉にはぢぬ暁もかげやぬらすむ　俊頼

晩田

千 村雨の露のこの葉にぬれてさへ[illegible]ひとつやぬらすらむ　為家

代 穂にいでて秋はてぬまで田の面に[illegible]かくしあへぬ[illegible]　土御門院

代 秋はまだはしたかとはぬ小田は鳥なき稲に刈りけり　建保[illegible]

い 晩の田のかりほのいほのとまをあらみ[illegible]　俊成

秋山田

古 ほにもいでぬ山田をもると藤衣稲葉の露にぬれぬ日はなし　讀人不知

拾 かりていのおくての山田ぞもえの世中はおもひねる哉　貫之

遠晩田

秋田風

秋田露

秋田庵

引板

稲花

後拾 秋の田に浪よる稲は山川のかはらにさそふやなぎのかげ　紀[illegible]

新 はるかなる山田の稲は袖ひぢて植ゑし早苗と見えぬ哉　貫之

六 晩の田の刈穂にかねてれど袖に白露ぞおく　全

古 門田の早苗とりしかど稲葉そよぎて秋風ぞ吹く　讀人不知

後 秋風にかへるまのこのむすぶ秋のはつかしとや　よみ人しらず

代 [illegible]庵の稲葉が上の袖まで[illegible]風の秋をまつかな　兼[illegible]

全 秋の田の穂むけの風にふし立つは月もさやけく露のしら玉　後鳥羽院

い 風そよぐなら[illegible]の苗の葉ずゑのつゆ小山田なるらん　定家

い 秋の田のかりほのいほにもる露ぞわがころもでの袖に[illegible]　為家

後 晩田守る山下庵のかり庵に稲葉の風に聞こゆ夜は　為長

千 [illegible]小山田の引板の音にまどろみもせず[illegible]　前中納言

代 足曳の山田のひたのきこえてもわれはさびしき[illegible]　讀人不知

詞 おしなべて山に稲葉はわたるなる[illegible]のとまやのくれ　家經

稲
寄稲述懐
稲田
秋花
秋夜深 二
秋花思
秋夜長 二

拾 苅てほす山田の稲はほしわびてまもるかり庵に幾世へぬらん　以美子

代 そら山田のおくての稲は苅にきてもるかり庵の露をかけつゝ　読人しらず

新 神よりも今日の為とや植つらんかの山田の稲のさかえむ　兼覧

古 われ世ににぬる事の中に出ね世にと交に秋果なむとや　よみ人しらず

代 小山田の苗代の稲のひらくもなくれわねらは歎くから　高遠

古 独ぬる床は草葉にあらねども秋くる宵は露けかりけり　讀人不知

仝 秋萩の下葉色付今よりやひとりある人のいねかてにする　仝

後 花薄そよともすれば秋風の吹かとぞきく独ぬる夜は　梅沢

内 秋の夜は人をしづめてつれづれと搔なす琴の音にぞ鳴ける　読人しらず

代 天の原かきくもれば月さへも秋の夜いたく更にけるかな　鎌倉右大臣

古 いにしへは鳴いつとも秋のよぞ物思ふ人の涙なりける　読人しらず

新 妹のいは物思ふとのまちつゝいとゞ寝ぬ夜の袖　六条

後 ながくと明しもやらぬ秋の夜はいまだ夢の間に寝し鳴けかし　以重

代 寝ぬのこゝに明らむ妹のこゑをしと独寝ても知ける　読人しらず

秋夜寒 二
秋花嵐
秋夜露
秋夜秋花露 二
寄秋花
惜秋花 二
妹寝覚

詞 秋の夜に寝ぬ夜なへぞおもふしく人もなき我身に残る物を　題経

新 妹されば雁の羽音に霜降て涼しき風の吹けるかな　人麿

仝 荻の葉に秋のさかる衣かへ袖の音ぞおもしろき　摂政太政

後 月は見てくれば人の音にだに待しやけふ秋は来にけり　中務

同 まきの戸にやどる萩の下の露ぞ秋の夜の秋の風　伊勢大輔

新 秋の夜は嵐に寝覚の露とおきてねむず袖かな　紀後

六 いにしへも秋かぜの袖の秋かねぬ露と契ても忘れ　読人しらず

古 萩が花ちるらんを野の露を寝にねぬぞ何か思さへ　仝

後 しもの秋の風のさく吹つれかぜぞいとゞ秋の音かれ　敦忠

新 今宵の秋の寝覚をしほに萩の下葉の恋ぞ待つらん　讃岐

古 く寝しとふ秋をいかにしてわか夢見る人さへぞ　有恒

後 家ちかき寝覚と思へど秋のこゑにこそわかせむとする　右大臣

後 よその風に秋の夜は月をねる人のいかぞ見る　長能

新 妹のこゑもや長月に来るさとりて寝覚せるかな　花山院

蘇葉

秋雨

杣時雨

蛙 かはづ

代
暁に秋の紅葉も染かねん残ることなく物ぞかなしき　家隆

六
蘇のこの葉ふく小嵐ぞ過ぬらしつゆこぼれつる袖ひらくなり　続古今 忠

代
秋の日のこがれて風にたてる立まちし村雨の空　為氏

仝
菊にふりけつ花に刈ひとぞしらぬかをるはの袖　紀親

男
かはらぬ此小まつかれて紅葉ちるらん　藤原兼

同
秋田刈るの庵に時雨ぬる家袖ぬれぬればこそ人ぞしる　よみ人今和

後
杣時雨ふればこそ山もあるかれの方からもろからん

勅
紅のやしほの色のふかき岩にぞかはかぬ君が袖の露かな　仝

男
草枕旅にかりもひと夜さへ夕べにまさる蛙かな　伊忠

同
瀬は子今落ぬるたぎつ白浪に蛙すくやねひとり　読人不知

仝
神なびの山下とよみ行く水にかはづなくなり秋といはむとや　同

拾
あしびきの山吹の花ちりにけり井手の蛙は今やなくらん　仝

仝
おもしろの岩垣くらし峰の蛙のみ鳴く川とそひくらん　古麿

杉すみ
と流せに蛙はすみて夕されば衣手寒しかはづ鳴くなり　続古今 忠

柿本人

小車鴫

拾
家にとは小萩の花とわくべきに[illegible]鴫のなくなる　兼盛

仝
来るらんのことのこ我れは女郎花の秋ぞあはれなる　丹人以

後撰
秋の野の花に露ぞ置ける色々に七草くさの花のいろ　元輔

拾
かぞふれば人にとまる萩の花に秋ぞよむ　経宣

六
かりそめに野べに旅ねする鴫の羽がき百羽がき　貫之

仝
庭草は鴫のたつらんこそ小鴫の鳴く人の為　みちのく

拾
石草の花にこのまた女郎花咲くる中に鴫鳴て　仝

〃
花の家は見しき物とや[illegible]この野山とも見にしかれ　よみ人しらず

〃
ゆひそ衣の袖も津の小萩の露にもやしかり　やまさ

〃
女郎花ぐさの時にのこる人をたづねん　躬恒

〃
うらふさしも入るとそ又のおもひ入る　貫之

後撰
逢坂の関の清水にかげ見えて今やひくらん望月の駒　読人不知

拾
逢坂の関の杉むらの関の清水のあさのこま　元輔

後撰
逢坂の関の杉村しげければやどにひくらん月のこま　良暹

駒引

関路駒

月

後拾 みちのくの安達の駒はなづめども今日逢坂の関まではきぬ 源縁△

金 望月の駒ひくときは相坂の木の下闇も見えずぞ有ける 重之△

詞 東路の遥に出る望月の駒にこよひや逢坂の関 仲正

新 逢坂の杉まの月のなかりせばいく木の駒といかでしらまし 匡房

新 東路の空へ相坂の山こえて都に出る月の駒 後京極

拾 何せんといひけらん相坂の関わたるにこそ駒はひかるれ 順

全 相坂に引並駒と秋霧の立隠せどもいなゝかれけれ 読人不知

拾 秋まださき引はかなき京らしの牧の駒なからん 貫之

拾 逢坂の関の岩かどふみならし山たち出るきりはらの駒 高遠

金 引駒の数よりほかに見えつるは関の清水の影にぞ有ける 隆経

万 わたの海に月の船うく桂かぢ人の見えずやかくれぬる 人麿

古 白雲にはねうちかはし飛雁の数さへ見ゆる秋の夜の月 全

後 光とも見えぬ秋もなく流るゝこの月の影にすまるらね 恵慶

後拾 大空の月の光しわかなれば板戸に秋はきえれぞ 寿暹

秋月明

秋月増光

待月

全 くもまにいと何事を待まれわたしてぞ見る秋の夜の月 隆季

金 鏡山峯より出る月なれば曇る夜もなき影をこそ見れ 紀伊

詞 思ふらむ心ぞ姨捨山に見しかどよしと夜半の月はまさりけれ 為忠

新 足引の山の端毎に雲消てひとりぞ照る秋の夜の月 関白忠通

新 いづくにか今宵の月の曇るべき小倉の山も名をやかふらん 千里

拾 秋の月いかなる物ぞ我が心何ともなきにいねがてにする 小町

代 天の原空さへわたる影見えて秋の夜月のひかりや 宮内

万代の秋をもとめて大空に照まさる秋の夜の月 大輔

古 久方の月の桂も秋は猶紅葉すればや照まさるらん 忠岑

金 いかなれば秋は光のまさるらん同じ三笠の山の端の月 永縁△

後拾 いつも見る月ぞと思へど秋の夜はいかなる影をそふるなるらん 長能

詞 いつとなく空なる月を見る秋しもことに照まさるらん 太政大臣

全 常よりも照まさるかな秋の夜の月しもいづる照まさるらん 家隆

万 春日なる三笠の山に月の船出ぬ見やびをのみねにたにかくれ 中麻呂

翫待月

金 さのみとは山端出る月をのこりなくとも憂ねべき哉　正季

詞 秋の夜の月待かねて思ひやる心いくたび山を越らん　恵慶

新 くらしかねさらすりぬ秋の夜の月待ほどの心計を　小弁

月 山のはに雲の横ぎる宵のまは出ても月ぞ猶またれける　是国△

新 白雲の夕かる山ぞすがる月はむかふる日影なりけり　後京極

金 月影を出んのうらにまちかねてうらみの宵を詠ぬる哉　紀伊

万 かくらの宮国山に出る月の出んと月のいさよく見覧　坂上郎女

千 秋の月高根の雲のあなたにて晴行空のくるゝ待けり　法性寺入道

同 待ほどはいかにぞすぐさまねかと椎の葉の宿の月　六条

新 山端を出ぞやらる月待と程絶なくて更にけるかな　為時

續 山のはの夕ぐれの海に移りぬれ月出る浪の下にまつらん　惠慶

續後拾 君がとふろねのゝ山端の月待程の心やくらん　加賀左衛門

万 山の端にいさよふ月と出んかと待つゝをるに夜ぞ更にける　讀人不知

金 名ごりの月まつ程のうへは山端のこゝぞ夏かすみける　大中臣

對山待月

對水待月

毎家待月

深夜待月

新 秋の夜は長しとひとすぢに待にかゝる山の端の月　空經

代 秋はなをなき人の月影ぞある夜すくぬねへまぬら　家之

ゞ 今ぞしる秋の月日のほどなきは月待人の為にぞありける　聖覚

ゞ 待つびぬ為そひん秋の夜は月の光もあへぬまで　素意

後拾 深山のえ秋めせで出るに待ちまるとぞ出る月かげ　小弁

新 秋のよの寒さも月はたてぬ月かぞ遠ざかる花の蔭らん　源縁△

千 桃みそ月はまむる秋のよは何事かはよひ語さる　具平親王

新 そのかみ人はまれど秋のよは月見てぬるまに絶せぬ　和泉式部

續 花とみし月にかくと見れど秋とらへれど語られつゝ　教長

新 哉めぐり色り秋にあひぬんぞろゝ月の影と詠めて　小侍従

什 哀しかりし秋の月はなさかつらん世の袖の涙り　信実

金 なにゆゑと何かひく年秋ども月は物まする世てぞ　俊為

新 わすれじなわくらはに秋の夜なれば月を桃え知らん　定家

月 わくらはて探ねその夜のはまる月いづくらぬ床のさむしろ　俊成女

莫待月

久待月

待見月

見月

年々見月

毎秋見月

深夜見月

毎夜見月

連夜見月
終夜見月
閑居見月
獨見月
獨對月
翫〻月

代 春日山峯の嵐にさそはれて出る月かけ幾夜見ぬらむ　攝津
續 有明のまゝ何夜かハ一月とみしかを詠そむる明の月　行盛
代 わかそともうへしそせし夕月秋の心のまゝにおもひそ詠めん　れ經
續後拾 秋の夜もなかき思ひも月を詠めハ秋のあくる日もしらさりけり　頼行女
金 まちいり入まて月は詠るかは秋ならぬ花のたむさにそしるらむ　光
續 此の秋は心や宿かなへ待見る夜の空のち世かね秋にこそ見月　中務卿
千 詠とハ小萩葉の露にとまれそハ出やんまし秋の夜けに月　源仲正
い さひしやかにさひしかり見月秋やりハ月の見てをいへらむ　源順
新 出のこる見るかと我ねる人にと秋の月は見えせもや　和泉式部
代 詠のこす月は見とハかハまて秋おきさる床のつきもし詠　堀川右大臣
秋 人しれぬ心の浪によせる月は後とハわしもの涙　入道前攝政
新 おもかけも月見るとおもひそせんと秋の長さハ我も猶　湯原王
拾 ひとりのみ月とハ何ちのかと秋になりて夜もなかし　讀人不知
續 ゆの面に夜なる月の見とも見えて人のこゝろのなかれかな　順

終夜翫月
連夜翫月
嶺上翫月
人家翫月
翫朝月
池上翫月

續 秋はそのことおもひさへせん夜半のもとに秋のよの月　元輔
拾 おもひ出る人のへハ見へて月影とその見る斗人をみし月　伊勢
續 見る人の心ハ花のおくれて月のかけのさやかなる苔の床　經信母
代 いつくそへ行くも見すとしも見てまたかつまた秋との月　俊恵
今 さる人の心や空に楽ね後らや秋く出そ秋のよの月　寂蓮
後拾 秋の夜は月見る心に秋ハ更ね泉のいのそひすさん　高遠
金 三笠山見えさしそ出しらね月そ明ね秋のよの月　明ノ季
續 秋の夜ハいかて長くそ来ぬへき宿の家にてね月の影　讃岐
代 すまれてしられハおもひなかさも冬の月の入なるそ　山田
詞 見津風きかれ秋の宿るそ今まてそ見る秋の夜もの月　良暹
代 とき家しけの心の宿のおもてやへ夜かね月残る　行家
後拾 くらふ見えるの月見れはるとに入ぬ夜の部　侍従
代 天の川岸を浪やおなしく後清くとも見る月の影に　右大臣
金 池にも小七夜の月は降まてにのまてに宿かとえる　堀河院

駒月

暮々駒月

未出月

月初出

漸昇月

漸昇月

停午月

漸傾月

新 妹の足ハ白露にうとくなりなどか枕をうへて袖そへの月をみ 式子内親王

新 秋のこに露逢そめし夕庭をうちすゝれて露々の秋の月影 宗明 △

代 さおもはりそむとまれ行し秋の月いふへきけれは涙をそへん 土御門院

い 秋のうへよするはいとゝ秋となれしわくそかくつく月かけとは 藤原家宗

万 結ぞそに家ある月ハ妹がかる二道の山に入てて見たら 三條實院

新 足引の山のわすれにもまくへハま行秋の月と[illegible] 經

続 梢坂の杉まとさそらしむれ人青羽の宗月や出て見 前關白

新 村雲の峰に入てゆとめてや山のおとに出る月かけ 後鳥羽院

代 数多や國山の秋風わきうれ筆といつる月如穿 前右政

月 見はて海の又への秋風てり山をとゆる月とるかし 中ノ有

金 いのちに雲の見はわき桃て独み月の出のおるらず 從三位院

代 見はてものことへわすひて後還に月の跡かるか 讀人不知

す さく中と出へは見わし桃ぞ山の峠ある光に月ゆくかる 良選

後拾 月影のうろくまに沈みは更へまるとさひかすれ

傾月

欲入月

臨入月

入後見月

続 秋の夜は見るほどにあかで入ぬれは月はなかれぬかりきまりて 赤染衛門

代 今 妹のつま宮の夕にかくり宮の字を流の音も荒かくなる月影 上御門院

い 秋風に夜の更ゆくは久ぞの更の浦ぞ水に月かくれぬ 謙倉右大臣

後拾 流れまつとも水まつめとやつきてみつかくて月は出るとぞ 家任

同 今ははや入ぬへくや河まで秋の月見かけてれ人にみぞれん 永源 △

野 月影の入るを惜むや人のすけは山のまえるますくぞ 女信め

代 宵のまにさぞそぬ絲ぬずま月すらば露をた地へさにば 式子内親王

全 絶えねばいうなくは家となくれ惜むもやれ杉ぞ山端の月 寂蓮 △

吉 あそこのと入ぬる月ははてぬ見に海山へのかわやらう 為家

代 わかぬく水まで後ぬ月のうへうし山の見述てはとぞなかり 崇徳院

新 入ぞてく添ぬるに数世でかくる山にめしまるのの月 和泉式部

古 いるれいば結にも出る月影の入るとかくかうせかるかに都 て宮人

千 わかもしく月のくうて山の奥へはわかるに雲を見なしゝらかる家 讀人不知

月影の入かる度はにのやうもまうらくん後のう木のも 基国 △

跋

序の文也のわきめ述べとも末半八分にもなりまし

恵米女